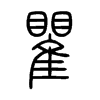
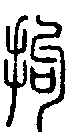
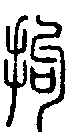
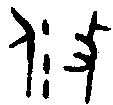
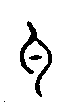
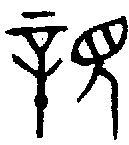
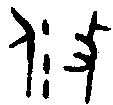
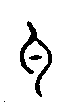
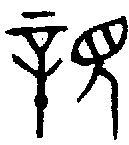
[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。  
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。  
  
　　  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　孫子曰く、兵を用（もち）いるの法は、散地（さんち）あり、軽地（けいち）あり、争地（そうち）あり、交地（こうち）あり、衢地（くち）あり、重地（ちょうち）あり、圮地(ひち)あり、囲地(いち)あり、死地(しち)あり。諸侯みずからその地に戦うを散地（さんち）となす。人の地に入りて深からざるものを軽地（けいち）となす。われ得（う）れば利あり、かれ得（う）るもまた利あるものを争地（そうち）となす。われもって往（ゆ）くべく、かれもって来たるべきものを交地（こうち）となす。諸侯の地三属（さんぞく）し、先（さき）に至れば天下の衆を得（う）べきものを衢地（くち）となす。人の地に入ること深くして、城邑（じょうゆう）を背（せ）にすること多きものを重地（じゅうち）となす。山林、険阻（けんそ）、狙沢（そたく）、およそ行き難（がた）きの道を行くものを圮地(ひち)となす。由（よ）りて入るところのもの隘（せま）く、従（よ）りて帰るところのもの迂（う）にして、かれ寡（か）にしてもってわれの衆を撃つべきものを囲地(いち)となす。疾（と）く戦えば存（そん）し、疾（と）く戦わざれば亡（ほろ）ぶるものを死地(しち)となす。このゆえに散地（さんち）にはすなわち戦うことなかれ。軽地（けいち）にはすなわち止（とど）まることなかれ。争地（そうち）にはすなわち攻（せ）むることなかれ。交地（こうち）にはすなわち絶（たつ）ことなかれ。衢地（くち）にはすなわち交（まじ）わりを合（がっ）す。重地（じゅうち）にはすなわち掠（かす）む。圮地(ひち)にはすなわち行く。圍地(いち)にはすなわち謀（はか）る。死地(しち)にはすなわち戦（たたか）う。  
  
\*1 \*2  
■地形篇では、地の形とその勢について述べられた。九地では、相手と如何に対応すべきかを述べる。■散地とは諸侯の国内、士卒は家に帰ることのできる距離にあり、その心は同一になり難く、散らばって家に帰りたくなることから散地という。■軽地と重地は対であり、相手国に入ること浅きと深きの別。浅きは引き返すことが容易く、戦う心が定まらず、先に進んでその心を絶つことが肝要。深きは糧食の調達が困難であり、糧食の掠奪が肝要。■争地は、攻めるに難く、守るに易き地であり、譲る者が得求める者が失うという。まともに攻めることは愚かであり、退却する、相手が愛（いつくし）む所を襲うと見せかけ、相手をその地の外に誘い出し戦うことが肝要。■交地は、四通する地、或は、広く平らで何処からでも往来できる地であり、全ての道或は地域を遮断することは、できかねる。守ることを主眼とし、誘い出されるな。守備不能とみせかけ、相手を誘い込んで伏兵で不意打ちせよ。■衢地は、諸侯の地三属とあり、三方面が諸侯の国に接している地。ここでは使者を派遣し、重く幣を交わし、親交、同盟することが肝要。衢は瞿\*1と行から成り、瞿は鳥が四方をキョロキョロ見渡し周囲を伺う様、行は十字路で、説文では、「四達、これを衢と謂う」とする。■圮地は、低湿地、泥濘（ぬかるみ）であり、攻守共に難があり、早々に立ち去るべし。■圍地の圍は、□と韋\*2から成り、韋は中央の□の上に右向きの足、下に左足があり□の周りを廻る形であり、□が包囲されている形でもある。その意味を明確にするために更に□が加えられたもの。ここでは、山や水で囲まれており、一旦入ると出づらい所、出入り口となる所が狭く、大軍であれ、そこでは少数での戦いとなる。そこに隙間を作ると攻め込まれるので、兵を充たすことが肝要。誘い出される、あるいは、誘い込まれる謀に注意が必要。■死地は、守って守り切ることができない地、死を賭して一丸となって戦う他無い。  
  
、、、、、、、、、　いわゆる古（いにしえ）の善（よ）く兵を用（もち）うる者は、よく敵人をして前後相（あい）及ばず、衆寡（しゅうか）相（あい）恃（たの）まず、貴賤（きせん）相（あい）救わず、上下（じょうげ）相（あい）収（おさ）めず、卒（そつ）離れて集まらず、兵合（がっ）して斉（ととの）わざらしむ。利に合（がっ）して動き、利に合せずして止（や）む。  
  
■及は人と又（手）からなり、手をもって追い及ぶ形。不相及、互いの連携が取れないこと。■恃の寺に保持の意があり、心中に自ら頼むところのある字。不相恃、お互い同士保持できないこと。■救は説文に「止むなり」とあり、論語の、「季氏旅於泰山。子謂冉有曰。女弗能救与。対曰。不能。子曰。鳴呼。曾謂泰山不如林放乎」の救とは季氏が泰山に行くことを止めることから来ている。それが季氏を救うことと同義であることによる。原義は求（呪霊を持つ獣）と攴（殴打する）からなり、その呪霊が及ぶことから救うこと（字統）。不相救はお互い害が及ぶことを阻止できないこと。■収の旧字は收で丩（絡め合わせる）と攴（締める）からなり、しっかりと結び合わせることが原義。不相収は上下の心がかみ合わないこと。■集の正字は雧、古くは、鳥が群集することを瑞祥として事が成就することをあらわし、大雅、大明では、「命すでに集（な）る」と用いられた。不集は後では集まらないことであるが、ここでは、成就しないこと。■齊qí　では（バラバラのものを）揃え、整えること、齋zhāi、にも通じ、zhāiでは物忌みすること。不齊であれば、烏合の衆。  
  
、、、、、、、、、、　あえて問う、敵衆（おお）く整いてまさに来たらんとす。これを待（まつ）こといかん。曰く、まずその愛するところを奪（うば）え、すなわち聴かん、と。兵の情は速やかなるを主（しゅ）とす。人の及ばざるに乗じ、虞（はか）らざるの道により、その戒（いましめ）ざるところを攻（せむ）るなり。  
\*1\*2\*3  
■衆整　多勢で整然としている敵が向かってくればどうすればいいのか？と問われて回答している。■多勢を分散させ、整然を乱雑に導く策を要する。■愛\*1　爱と心からなり、爱は後ろを顧みて立つ姿であり、愛は後ろに心を残しながら立ち去ろうとする姿で、いとおしむ、いつくしむ、したしむこと。相手が大事と思うものを奪えという。■聽は甲骨文では\*2で、耳で神意を聞き取ること。小篆では\*3であり、眼力で内省することが加わり、聞いて意を汲み取ること。理解し、赦す、従うことでもあり、ここでは意を汲んで相手が従うとしている。■情　兵は本能的に素早く済ませたい。■相手を予定外の行動に分断し、不及は準備ができていない処、そこにつけこむ。不慮は予期していない処、そこに攻め込むなり、伏兵を配し待ち伏せをする。不戒はつまりは警戒していない処、そこを攻めろという。それも、ぐずぐずしていては機を失うため、すみやかに実施すべしという。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、　およそ客（かく）たるの道は、深く入ればすなわち専にして、主人克（か）たず。饒野（じょうや）に掠（かす）めて三軍食（しょく）足り、謹（つつし）み養いて労するなく、気を併（あわ）せ力を積み、兵を運（めぐ）らし計謀（けいぼう）して測（はか）るべからざるをなす。これを往（ゆ）くところなきに投ずれば、死すもかつ北（に）げず。死いずくんぞ得（え）ざらん。士人（しじん）力を尽くさん。兵士、はなはだ陥（おちい）ればすなわち懼（おそ）れず。往（ゆ）くところなければすなわち固く、深く入ればすなわち拘（こう）し、己やむを得ざればすなわち闘う。  
  
\*1\*2  
■客と主はゲストとホーム。■専　専一、他を顧みないで、その事のみに心を傾ける。■饒　有余ること/地味が肥えていること。敵地に深く入れば、まず、食糧を潤沢に掠し、休養し鋭気を養え。■掠lüèは扌shǒuと京jīngから成り、扌は手、京は古くは凱旋門、その原義は積土した軍社であり、掠はそれを手にすること。左伝、襄公十一年に、「禁侵掠（侵入して掠奪することを禁じた）」とある。■兵を動かすとなれば、相手の予測を越え、不意に出でよ。■北běi\*1二人が相背く形、背（そむく）の初文。逃げる、背走、敗北を意味した。敵地深く、逃げ場のない処に兵士を投入せよ。■死ぬ他ないとなれば、力を尽くす。■死を覚悟すればもう恐れるものはない。■拘jū\*2は扌と句jùから成り、句は身を屈している形で、拘は引いて捕らえること。■逃げ場なくば決心が固まり、深く侵入すれば閉じ込められたようなもので、戦うほかない。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、  
このゆえに、その兵修（おさ）めずして戒（いまし）め、求めずして得（え）、約せずして親しみ、令せずして信ず。祥（しょう）を禁じ疑（ぎ）を去り、死に至るまで之（ゆ）くところなし。わが士、余財（よざい）なきは貨を悪（にく）むにあらず。余命（よめい）なきは寿（じゅ）を悪（にく）むにあらず。令（れい）、発するの曰、士卒（しそつ）の坐（ざ）する者は涕（なみだ）襟（えり）を霑（うるお）し、堰臥（えんが）する者は涕（なみだ）頤（あご）に交（まじ）わる。これを往（ゆ）くところなきに投ずれば諸（しょ）・劌（けい）の勇（ゆう）なり。  
  
\*1\*2\*3\*4\*5甲骨文金文篆体象形字的字形演变\*6\*7\*8  
■修xiū\*1は攸yōu\*2と彡shānから成り、攸は人の後ろから水をかけて洗う形で身を浄めること、彡は文様が美しいこと。事を行うにきれいに身を浄めることが原義で、ここでは整え治めること。■不求而得は説が別れる。求めずして兵が力戦する、求めずして兵が集結する等々。求qiú\*3は獣皮を剝いだ形で、裘（獣の皮で作った衣服）の初文ともされるが、古くは「乃の友を償求（しょうきゅう）せよ」「乃の人を求（つぐな）へ」と贖（つぐな）う義で用いられ、後に求（もとめる）義で用いられるようになる（字統）。従って、償いをせずとも（士人尽力）を得ると釈すことができる。■約yuēは糸と勺sháo\*4から成り、勺は液体を汲む匙の形とされるが、包\*4甲骨文金文篆体象形字的字形演变（妊む）、抱えて蔵することにも通じる。約束はお互いを縛り合わせること。■親qìng\*6は辛xīnと見jiànから成り、辛は木を切って作った神位、それを見る、寴\*7は廟内でそれを見る形、祖神を同じくすること、親族であること。■不約而親は、死して戦うことを約せずして、その志を同じくすること。■令lǐng\*8は礼帽を付けて跪いて神意を聴く形。■信は卜文、金文では見られない字とされ、春秋時代になれば、「言にして信ならざれば、何を以てか言と為さん」とされ、盟言の言をさした。■不令而信は、命令がなくとも、その言が発されたとおりに行われること。■祥xiángは、左伝では、「是何の祥ぞ、吉凶焉くにか在る」とあり、予兆のこと。禁祥はその予兆の吉凶を卜占することを禁じること。卜占の吉凶に疑義を抱き心が乱れることを避ける。去疑とは、死を賭して戦う他ないことを覚悟させること。■今生の別れと涙がとめどなく溢れるのは死を決した者のありよう。■諸は吳の公子光が吳王の僚を刺殺せしめた專諸（せんしょ）、劌は魯の莊公に事（つか）え、嘗て匕首を執りて、齊の桓公を劫（おど）した曹劌（そうかい；曹沫）。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、齋（）、、、、、、、　故ゆえに善（よ）く兵（へい）を用（もち）うる者ものは、譬（たと）えば率然（そつぜん）の如（ごと）し。率然（そつぜん）とは、常山（じょうざん）の蛇（へび）なり。其（そ）の首（くび）を撃（う）てば則（すなわ）ち尾（お）至（いた）り、其（そ）の尾（お）を撃（う）てば則（すなわ）ち首（くび）至（いた）り、其（そ）の中なかを撃（う）てば則（すなわ）ち首尾（しゅび）倶（とも）に至（いた）る。あえて問う、兵は率然（そつぜん）のごとくならしむべきか。曰く、可（か）なり。それ呉人（ごひと）と越人（えつひと）と相（あい）悪（にく）むも、その舟を同じくして済（わた）り風に遇（あ）うに当たりては、その相（あい）救うや左右の手のごとし。このゆえに馬を方（なら）べ輪を埋（う）むるも、いまだ恃（たの）むに足らず。勇を斉（ひと）しくし一（いつ）のごとくするは政（せい）の道なり。剛柔（ごうじゅう）みな得（う）るは地の理なり。ゆえに善（よ）く兵を用（もち）うる者は、手を携（たず）さうること一人（いちにん）を使うがごとし。已（や）むを得（え）ざらしむればなり。  
  
\*１  
■率然　軽敏、俊敏なことだが、孫子の喩えから伝説上の、常山の蛇の呼称となった。■常山　中国五山の一つ、北岳の恒山。周代より道教の地として知られる。山西北部高原と冀中平原の間にあり、峻険な地形とその位置により、山間の河谷に関を設ける兵家必争の地となった。■方　詩の邶風·谷風に、「就其深矣、方之舟之（其れ深きに就（つ）き、之を方（つな）ぎ之を舟とす）」とあり、高亨注に、「方、以筏渡舟、以船渡（方とは、筏を以て渡舟とす、船を以て渡す）」とある。方\*１は横にわたした木に人を架けた形、圏外の境界を表わす呪禁の風俗が原義という（字統）。木を繋いで筏として渡舟とするごとく、船を繋いで兵馬を渡す。宿営地の周囲に馬を繋げば、敵襲に敏感に反応するセンサーとなろう。埋輪すれば防御柵の代用となる。これでは防御としては十分ではない。政之道、地之理、不得已を必要とす。■政之道　勇者が先走らず怯者が遅れず一斉に動く、上下粛然として動くには、指揮に対する上下の信頼が根本である。■地之理　高きから低きに水を落とすが如く地の利を得れば、兵の剛柔と関係なく、高き側は剛、低くき側は柔となる。■不得已　兵を協力する他ない状況に置く。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　軍に将（しょう）たるのことは、静もって幽、正（せい）もって治（ち）、よく士卒（しそつ）の耳目（じもく）を愚（ぐ）にし、これをして知ることなからしむ。その事（こと）を易（か）え、その謀（ぼう）を革（あらた）め、人をして識（し）ることなからしめ、その居（きょ）を易（か）え、その途（みち）を迂（う）にし、人をして慮（おもんぱか）ることを得ざらしむ。帥（ひき）いてこれと期すれば、高きに登りてその梯（てい）を去るがごとし。帥（ひき）いてこれと深く諸侯（しょこう）の地に入りて、その機を発すれば、舟を焚（や）き釜（かま）を破り、群羊（ぐんよう）を駆（か）るがごとし。駆られて往（ゆ）き、駆られて来たるも、之（ゆ）くところを知ることなし。三軍の衆を聚（あつ）め、これを険に投ず。これ軍に将（しょう）たるの事（こと）と謂（い）うなり。九地（きゅうち）の変（へん）、屈伸（くっしん）の利、人情（にんじょう）の理（り）、察（さっ）せざるべからず。  
\*1\*2\*3 　\*4　\*5  
■幽yōu\*1は𢆶と火からなり、糸を火で燻（くす）べて玄（くろ）くすること。暗い、隠す、かすかなこと。敵に知られないはもとより、自軍にも知られない。■愚yú \*2は禺と心からなり、禺は、実体が知られていないようであるが、頭部の大きい虫とみられ、そのわりに機知に乏しいこと、説文では、尾長猨（さる）とみられており、士卒を猨扱いしている感もある。耳は聞こえておれば善し、目は見えていれば善し、詮索をさせるな。■易yì \*3 は、首と足と尾からなるとかげ、いもり、やもり、あるいはカメレオンの象形、日と月からなり陰陽を表わす、日と勿からなり、玉と玉の光とする説があり多様。ここでは計画や処を替へること。■事は「説文」に、「職なり」とあり、職務や工作、官吏を指す語でもあった。■革gé \*4は獣皮から毛を抜き取ったもの、更（あらた）まること。古字では上を廿、下を十とし三十年で一世と為し、道が更るとした。敵情により、工作を易（か）へ、戦術を革（あらた）むに、士卒に即応せしめよ。■居場所を不明にし、近づいていても遠方に居るように思わせ、不意を突け。■期は「説文」に「會なり、合なり」とあり、ここでは敵に遭遇する時のこと。有利な地を占めれば、梯を去るとは、敵に向かって前進あるのみ。■機は「説文」に「発を主（つかさど）るは、機なり」とあり、弓を発する、戦端をひらくこと。退路を絶ち、羊を駆るように敵に向かわせよ。■険　必死の状態に置くこと。■變（変）biàn \*5は䜌と攴からなり、䜌は言を糸で飾ったもので盟誓、攴は殴打すること、盟約を破ること、正式なものを乱すことが原義。■屈伸　ここでは屈は後退、伸は前進のこと。■人情　ここでは士卒の心を一にし、必死に導くこと。  
  
、、、、、、、、、、　およそ客（かく）たるの道は、深ければすなわち専（もっぱら）に、浅ければすなわち散ず。国を去り境（きょう）を越えて師するものは絶地（ぜっち）なり。四達（したつ）するものは衢地（くち）なり。入ること深きものは重地（ちょうち）なり。入ること浅きものは軽地（けいち）なり。固（こ）を背（せ）にし隘（あい）を前にするものは囲地（いち）なり。徃（ゆ）くところなきものは死地（しち）なり。  
  
\*  
■**專**zhuān \*は叀と寸からなり、叀は橐（ふくろ）の上をくくった形、寸は手、橐の中に入れたものを手で打ち固めること（字統）という。軍は敵地に深く侵入すれば一団となるが、浅いとばらけ易い。■絶地は国境を越え、母国から遠く離れた地を想定しており、九地とは別の概念。絶地では、その時点で敵地の中におり、衢地、重地、軽地、囲地、死地の考察の観点が、変化する。  
  
、、、、、、、、、、、、、  
このゆえに散地（さんち）にはわれまさにその志（こころざし）を一（いつ）にせんとす。軽地（けいち）にはわれまさにこれをして属せしめんとす。争地（そうち）にはわれまさにその後（うしろ）に趨（おもむ）かんとす。交地（こうち）にはわれまさにその守りを謹（つつ）しまんとす。衢地（くち）にはわれまさにその結（むすび）を固くせんとす。重地（ちょうち）にはわれまさにその食（しょく）を継（つ）がんとす。圮地（ひち）にはわれまさにその塗（みち）に進まんとす。囲地（いち）にはわれまさにその闕（けつ）を塞（ふさ）がんとす。死地（しち）にはわれまさにこれに示すに活（いき）ざるをもってせんとす。ゆえに兵の情（じょう）、囲（かこ）まるればすなわち禦（ふせ）ぎ、已（や）むを得ざればすなわち闘い、過（すぐ）ればすなわち従（したが）う。  
  
\*  
■散地は母国内を想定しており、絶地に含まれないため、ここで通常の九地での対応に戻っていよう。散地では将兵の心を一にすることが難しい。■屬shǔは、尾と蜀からなり、尾は獣の牝（ひん）、蜀は獣の牡（ぼ）器であり、牝牡が相連なること、連続すること（字統）。軽地では、前後を連ねさせることが難しい。■趨qū　ここでは快步走のこと、争地では、後方の部隊が前方の部隊に追い付かねば、奪取しても維持ができない。■謹qū　ここでは慎重なこと、交地では、小心なくらいに警戒をしないと、守ることはできない。■固gù　使を派遣し、その利を説き、財幣を献上し、盟誓を交わすことを怠れば、心が離れる。衢地では、結盟を固めておかねば、危うい。■繼jìは、㡭と糸からなり、㡭\*は絲を両断する象。それを糸でつなぐことが繼。敵の食を分断して自軍の食をつなぐこと、食の掠奪。重地での食糧の自給は極めて困難。■塗túは「説文」に「泥なり」とある。圮地とは泥の中を進むこと。■闕quēは、宮門の両方の楼台で、中に通道があり、宮門が閉じられている時に出入りする。囲地では、逃げ道を開き、敵の戦う心を分断せんとする。逃げ道を塞ぎ、死地とし、心を一にして必死で戦うことが出来ねばならない。■兵の情（こころ）とは、囲まれれば守ろうとし、逃げ場がないなら戦う他なく、あまりに絶望的なら指揮官に従うのみとなる。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　このゆえに諸侯の謀（はかりごと）を知らざる者は預（あらかじめ）交わることあたわず。山林、険阻（けんそ）、沮沢（そたく）の形（けい）を知らざる者は軍を行（やる）ことあたわず。郷導（きょうどう）を用（もち）いざる者は地の利を得（う）ることあたわず。四五（しご）の者、一（いつ）を知らざるも覇王（はおう）の兵にあらざるなり。それ覇王（はおう）の兵、大国を伐（う）てば、すなわちその衆聚（あつ）まることを得ず。威（い）、敵に加うれば、すなわちその交わり合うことを得ず。このゆえに天下の交わりを争わず、天下の権（けん）を養（やしな）わず、己（おのれ）の私（わたくし）を信（の）べ、威（い）、敵に加わる。ゆえにその城は抜（ぬ）くべく、その国は隳（やぶ）るべし。無法の賞（しょう）を施し、無政の令（れい）を懸（か）け、三軍を犯す衆（しゅう）は、一人（いちにん）を使うがごとし。これを犯すに事（こと）をもってし、告（つ）ぐるに言（げん）をもってすることなかれ。これを犯すに利をもってし、告（つ）ぐるに害をもってすることなかれ。これを亡地（ぼうち）に投じてしかるのちに存（そん）し、これを死地（しち）に陥（おとしいれ）てしかるのちに生（い）く。それ衆は害に陥（おとしいれ）て、しかるのちによく勝敗（しょうはい）をなす。  
  
\*1\*2\*3\*4\*5\*6  
■四五者　曹操や張預は九地の利害、あるいは先に述べた将軍の事、九地の変、屈伸の利、人情の理とする。夫覇王之兵以下の情況とする説、四五者は誤りで、文頭の三つの不知であり三者とする説もある。覇王の兵に非ずとあり、以下に覇王之兵の説明をしており、それらの一つでも欠ければ覇王とはなれない。■覇王bà wáng　儒家は徳により天下を有すを王道、武力と策略により天下を有すを覇道とし、覇道の王とするが、ここでは、天子を立てて天下の秩序を維持する諸侯の旗頭のこと。■衆zhòng\*1は□と乑yín（多くの人）からなり、元来は、農閑期に耕作者を一定の地域に集めて他の用務に服せしめることからくる。軍役に用いることもある。■聚jù\*2は取qǔと乑からなり、従う人々を集めること。衆不得聚は衆を軍役に集めることが出来ないこと。■交不得合　諸侯が同盟出来なくなること。■不争天下之交　不養天下之権　天下に同盟を競わず、天下に及ぶ権力を養わないとは、同盟を築き天下の権を保つのではなく、諸侯を分断し天下の権を奪うこと。■信己之私　信は古くは、xìnで真心、誠意、信じること、shēnで伸となる。曹操が信を伸、己之私を自私とし、諸家も私欲、私志を伸（の）ぶと釈している。つまり、自分のやりたいようにやるとしている。信や私は甲骨文には見られず、信は春秋時代からの語で、「言にして信ならずんば、何を以てか言となさむ」で盟誓の言（字統）であり、説文では「誠なり」とする。私\*3は左辺が耕作するもので右辺は耜（すき）で耕作者、或は、私有地、その耕作権を持つ隷農が原義（字統）。己之私は己に属する耕作者であり、諸用や兵役に徴集した耕作者でもあった。つまり、私兵、己の兵を固く信じることではないか。その兵で敵に威圧を加えるから、相手が恐れる。■隳は隋と**𠇍から**なり、隋の本字は[隓](https://en.wiktionary.org/wiki/%E9%9A%93" \l "Chinese" \o "隓)、古くはhuīで隳（毁坏）と同じ、duòで惰（懈怠）と同じ（漢典）とある。**𠇍** は土の崩れる形、[隓](https://en.wiktionary.org/wiki/%E9%9A%93#Chinese)は聖所を守り隠すことが原義で隳はその土が崩れる、皇廟や宗廟のごとき聖所が崩壊することが原義（字統）。国の宗廟が崩壊するイメージがある。■無法之賞　法外の賞。■懸無政之令　懸は公示、公布すること。無政の令を示す。■犯fàn \*4は犭quǎn（獣）と㔾jié（人が前向きに俯く形）からなり、獣と交わる形であり、タブーを破る行動。曹操は犯を用とし、「賞罰を明らかにせば、眾を用うと雖も、一人を使うが若きなり」とし、諸家がそれに準じて釈した。三軍は諸侯の全軍勢。諸侯の軍には伝統的な身分による軍律がある。規律ある士大夫による戦車戦から農民を徴兵する歩兵戦が加わり、軍律が実情にそぐわなくなることも想定される。無法之賞、懸無政之令はその軍律のタブーを破るものであり、功に応じて賞には限界を設けず、政令にとらわれず、自身の最善を尽くせしめば、衆を一人のごとく使うことができるとでもしたか。■下克上の時代においては、誓約はあてにはならない。言ではなく事（行為）により判断せよ、害を告げず利により動かせ。■そういう彼等を本気にさせるには、亡地に投入すべし。■亡wáng\*5は死者の肢（あし）を曲げている形（字統）。■死sǐ\*6は歺è（残骨）と人からなり、死骸を拝する、弔う形。死を生死に使うのは書経、詩経の文献に至ってからのことで、以前には死は司・治の義に用いられた（字統）。ここでは、存亡、生死が対となっている。■人は安寧にあっては勝負しない、害されるとなれば、勝負する。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　ゆえに兵をなすの事（こと）は、敵の意に順詳（じゅんしょう）し、敵を一向（いっこう）に并（あわ）せて、千里に将（しょう）を殺すに在（あ）り。これを巧（たくみ）によく事（こと）を成す者と謂（い）うなり。 このゆえに政（せい）挙（あ）ぐるの日、関（かん）を夷（とど）め符（ふ）を折（おり）て、その使（し）を通ずることなく、 廊廟（ろうびょう）の上に厲（きび）しくして、もってその事（こと）を誅（せ）む。 敵人開闔（かいこう）すれば必ず亟（すみやか）にこれに入り、その愛するところを先（さき）にして、微（ひそか）にこれと期（き）し、践墨（せんぼく）して 敵に随（したが）い、もって戦事（せんじ）を決す。 このゆえに始めは処女（しょじょ）のごとく、敵人、戸を開き、 後（のち）には脱兎（だっと）のごとくにして、敵、拒（ふせ）ぐに及（およ）ばず。  
  
\*1\*2 \*3\*4 \*5\*6\*7\*8\*9  
■順詳　順は慎に通じ、慎しみて密地（枢要な職務）を審かに察すこと（漢典）で敵の意を慎重に察することとされる。順はしたがうこと、詳はことごとく、また佯に通じ仮装、偽る義があり、ことごとく敵の意に従っているとみせかけること。■并敵一向　千里殺將　曹操が、「兵を幷せて敵に向えば、千里と雖も能く其の將を擒（とりこ）にす」としたことで、自軍の兵力を合わせ、一致して/一直線に、敵に向かう方向で釈される。并敵は敵に合わせること。一向は同じ向き、敵に同化することではないか。千里は遙か遠いこと、広大なことであるが、ここでは「ついには」、「最終的には」であらう、敵もすっかり味方と油断する。そこで将を殺すべし。敵の意に従うとみせかけ、敵に并わせ同道し、心を許した所で討ち果たす。■政舉之日　廟算の成る日、戦略戦術の定まった日　■夷yíは甲骨文では\*1金文では\*2となり、説文では、「平らぐなり、大に従い矢に従う」としている。これは漢代の解釈で、甲骨文では膝を折り曲げた形、死体とみられ、金文では矢陳（矢を陳列する）ともされる。夷関は関所を封鎖すること。■折zhé\*3は屮二つと斤からなり、説文では、艸(草)を斤で断つとしている。誓や哲（元来は折と矢からなる）に用いられており、草木や矢を折ることに特別な意味があったとされる。ここでは割符（通行手形）の機能を停止すること。■廊廟は庇のある廟で政務を行う所、朝廷あるいは政所。■曹操は、誅を治とし、杜牧は、厲を揣（おしはか）るとし、張預は、廊廟で慎重に謀り、秘密にして、外に漏らさないとする。■厲lì\*4 は厂hǎnと萬wànからなり、厂は崖のような秘所、萬はサソリのような虫であり、秘密の所でこの虫で呪詛をして病を招くことを癘（えやみ）とした（字統）。廊廟に決定した上で厳重に秘す。以誅其事を、作戦を計画すると釈す説もある。■誅zhūは言と朱からなるが、金文では\*5で朱と戈からなり朱筆で印をした犯罪者を戈で殺すこと。消除の義があり、秘した上で、敵に漏れないように消し去る。■闔héは門と盍héからなり、門に取り付けられた扉。■亟jí\*6は〓(上下)と人と𠙵と支から成るが、𠙵が口、支が又に置き換えられた。甲骨文字では、\*7のみで頭と足が上下につかえている様。金文では前に𠙵があり祭祀に従事しているのであるが、狭い所で後ろから殴打されている形。殛は刑罰による処刑。説文で、「敏疾（速やか）なり」とするのは、易で「天の時を承（う）け、地の利により、口をもてこれを謀り、手をもてこれを執る。時は失うべからず。疾（と）きなり（繋伝）」と釈されてのこと。■微與之期　曹操は、其の愛する所とは「便利の地」そこに「後に人を發して、先に人に至る」とした。杜牧は、微を潜とし、張預は、敵が来ないことを恐れ、密かに敵に期日を漏らし、敵を先発させ、後発して先にその地に至ると解している。■期qīは、説文に「會なり。月に従い其声、、古文は日と丌に従う。日は猶時のごとし」とある。金文では\*8、甲骨文では\*9とする。時や場所を定めて会うこと。動詞では約束する、希望することとなる。jīでは一周年、喪に服す期間を示す。■践墨　法度を遵守する、规矩に按照す（ルール通り）。■敵人開闔以下は、敵が隙を見せれば、速やかに侵入して、敵の急所を、隠密裏裡に窺い、敵に従って行動して、決戦するという風に釈される。文字通り読めば、敵人が門の扉を開けば、（疑念を抱かせないように）必ず速やかに入り、まず、その愛（いつく）しむ所、密かに之（内通する者）と時を約して、決められたとおり敵に従い、そうすることで戦事を決めよ、となる。そのためには廟算したことが、絶対敵に漏れてはいけない。敵は、密かに内通者が暗躍しているなれば、防ぎようがない。これも、戦わずして勝つ方策である。  
了　2020年10月21日 更新　2023年４月11日  
  
**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）  
〈九地〉篇　  
  
曹操曰く、戰を欲（す）地に九有り。  
李筌曰く、敵に勝つ地に九有り、故に〈地形〉の下に次ぐ。  
王晳曰く、用兵の地に、利害が九有り。  
張預曰く、用兵の地に、其の勢が九有り。此の論は地勢にして、故に〈地形〉に次ぐ。  
  
（孫子曰：用兵之法，有散地，有輕地，有爭地，有交地，有衢地，有重地，有圮地，有圍地，有死地。）  
曹操曰く、此は九地の名なり。  
張預曰く、此は九地の名。  
  
（諸侯自戰其地，為散地。）  
曹操曰く、士卒が土を戀い、道近くして散じ易し。  
李筌曰く、卒は土を恃（たの）みて、妻子を懷（おも）い、急（せか）れて則ち散ず、是を散地と為（す）。  
杜枚曰く、士卒は家に近づき、進みて必死の心無く、退きて歸投の處有り。  
杜佑曰く、其の境內の地に戰えば、士卒の意は專（もはら）ならず、潰散の心有り、故に散地と曰う。  
梅堯臣は杜牧が註に同じ。  
王晳は曹操が註に同じ。  
何氏曰く、散地は、士卒が土を恃み、妻子を懷戀し、急れば則ち散走す。是を散地と為（す）。一に曰く、地に關鍵（閉ざされた門）無くば、士卒は散走し易く、此の地に居るは、數（しばし）戰う可からず（何度も戦うことが出来ない）。又曰く、地遠くして四平（四方が平地）にして、更に要害無くば、志意は堅からずして離れ易し、故に、散地と曰う。吳王が孫武に問いて曰く、「散地にして、士卒は家を顧み、與に戰う可からず、則ち必（ふくつ）に固守して出でず、若し敵が我が小城を攻め、吾が田野を掠（かす）め、吾が樵採を禁じ、吾が要道を塞ぎ、吾が空虛を待ちて急に來攻せば、則ちこれを如何？」と。武が曰く、「敵人が吾が都に深入せば、多くが城邑を背にし、士卒は軍を以て家と為し、專に輕鬬を志す。吾が兵は國に在りて、土に安らぎ生を懷い、以て陳せば則ち堅からず。以て鬬わば則ち勝たず。當に人を集め眾を合わせ、穀を聚め帛を蓄え、城を保ちて險に備え、輕兵を遣わして其の糧道を絕つべし。彼が戰を挑めば得ず、轉輸が至らず、野に掠む所無くば、三軍は困餒（困乏饑餓）す。而（このこと）に因りて之を誘えば、以て功有る可し。若し野戰を欲（せ）んとせば、則ち必ず勢に因り險に依り伏を設け、險を無くし則ち天氣の陰晦（昏暗）、昏霧に隱れ、其の不意に出で、其の懈怠を襲わば、以て功有る可し」と。  
張預曰く、境內に戰わば、士卒は家を顧る。是れ散り易き地なり。鄖人（うんひと）が將に楚師を伐たんとす。楚の鬬廉（とうれん）が曰く、「鄖人は其の郊に軍し、必に誡めず。近き其の城を恃みて、鬬志有ること莫し」と。果して楚に敗れる所と為るは是なり。  
  
（入人之地而不深者，為輕地。）  
曹操曰く、士卒は皆て輕くして返る。  
杜牧曰く、師が出でて境を越え、必ず舟梁（船と橋）を焚くは、民に返顧（回顧）の心無きを示す。  
李筌曰く、退くに輕きなり。  
梅堯臣曰く、敵に入りて未だ遠からずんば、道近くして輕くして返る。  
王晳曰く、初めて敵境を涉（わた）るは、勢輕くして、士に未だ鬬志有らず。  
何氏曰く、輕地は、退くに輕きなり。敵境に入りて未だ深からず、往くも返るも輕く易く、止り息（やす）む可らず。將に數（しば）し動きて人を勞すことを得ざるべし。吳王が孫武に問いて曰く、「吾は輕地に至り、始めて敵境に入るも、士卒は還るを思い、進むに難く退くに易し。未だ險阻を背にせずして、三軍は恐懼し、大將は進まむと欲（し）、士卒は退かむと欲（し）、上下は異心す。敵は其の城壘を守り、其の車騎を整え、或いは吾が前に當り、或は吾が後を擊つ。則ち之を如何？」と。武曰：「軍が輕地に至り、士卒が未だ專（もはら）ならず、以て入りて務を為し、以て戰を為す無れ。故に、其の名城に近づくこと無く、其の通路に由ること無く、疑佯惑を設け、示すに將に去らむとすが若くす。驍騎（勇猛な騎兵）を選び、銜枚（口に木片をくわえさせ声をたてず）して先に入り、其の牛馬六畜を掠め、三軍に見得（見て納得）せしめば、進みて乃ち懼れず。吾が良卒を分ち、密に伏せる所有れば、敵人が若し來れば、之を擊て、疑うこと勿れ。若し其れ至らずんば、之を捨てて去れ」と。又曰く、「軍が敵境に入れば、敵人は壘を固め戰わず。士卒は歸るを思い、退くを欲すも且（また）難く、之を輕地と謂う。當に驍兵を選び要路に伏せ、我は退き、敵は追い來る、則ち之を擊つなり」。  
張預曰く、敵境に入り始めば、士卒は還るを思う。是は輕返の地なり。尉繚子が曰く、「征役に軍を分ちて歸る、或は戰に臨みて自ら北（に）げるは、則ち逃傷（敗走時に受ける傷）は甚し」と。言うは、民兵は四集し、占地に分屯し、北來者をして當に北道せしむ。則ち多くは逃れ、以て其れ之を開くのみ。  
  
（我得則利，彼得亦利者，為爭地。）  
曹操曰く、少を以て眾に勝つ可し、弱が強を擊つ。  
李筌曰く、此れは阨喉（相手の急所となり）險を守る地、先に居る者が勝つ。是を爭地と為（す）なり。  
杜牧曰く、必爭の地とは、乃ち險要（険しくて重要）なり。前秦の苻堅（ふけん）は先に大將呂光（りょこう）を遣わし西域を討つ。堅が敗績して（敗北して功績を失う）後に、光は西域より還り、師が宜禾に至ると、堅は涼州刺史の梁熙（りょうき）に謀りて之を拒む。高昌太守の楊翰（ようかん）が曰く、「呂光は新たに西國を定め、兵は強く氣は銳く、其の鋒に當る可からず。若し流沙を出でば、其の勢は測り難し。高梧の谷口は險要にして、先ず之を守るべし、而して其の水を奪えば、彼は既に渴に困しており、人は自から然り戈を投ず（休戦す）。以て遠と為すを守る可からずとすが如し、伊吾之關、亦之を拒ぶ可し。若し此の二要を廢せば、計を為し難し。地には必ず爭う所有り、真に此の機なり」と。熙は從わず、竟に光が滅す所と為る。  
陳皥曰く、彼我若し先に其の地を得ば、則ち以て少が眾に勝ち弱が強に勝つ可し。  
杜佑曰く、山水の阨口（狭くふさがった出入り口）を謂い、險固の利有りて、兩敵が爭う所。  
梅堯臣曰く、我と無く彼と無く、先に得れば則ち利。  
王晳は陳皥が註に同じ。  
何氏曰く、爭地は便利の地にして先に居る者が勝ち、是を以て之を爭う。吳王が孫武に問いて曰く、「敵が若し先に至り、要に據り利を保ち、簡兵練卒（優れた兵士を選び訓練する）し、或は出で或は守り、以て我に備えて奇さば、則ち之を如何？」と。武が曰く、「爭地の法は、先に據りて利と為（す）。敵が其の處を得ば、慎しみて之を攻むこと勿れ。引きて佯（いつわり）て走（に）げ、旗を建て鼓を鳴らし、其の愛（いつくし）む所に趣き、柴を曳きて塵を揚げ、其の耳目を惑わす。吾が良卒を分ち、密（ひそか）に伏せる所有り。敵は必ず出でて救う。人が欲せば我は與え、人が棄てば我は取る。此れ先を爭う道なり。若し我が先に至りて敵が此の術を用いば、則ち吾が銳卒を選び、其の所を固守し、輕兵で之を追い、伏を險阻に分け、敵人が還りて鬬えば、伏兵が旁より起つ。此れ全勝の之道」と。  
張預曰く、險固の利、彼我之を得ば、皆て少を以て眾に勝ち、弱が強者に勝つ可し。是れ必に之を爭う地なり。唐の太宗は五千人を以て成皐の險を守り、坐して竇建德が十萬の眾を困すは是なり。  
  
（我可以往，彼可以來者，為交地。）  
曹操曰く、道が正（主、中央）で相交錯すなり。  
杜牧曰く、川が廣く地が平らにして、來す可く往す可し、以て戰を交えるも壘に對すにも足る。  
陳皥曰く、交錯是なり。言うは、其の道路交橫し、彼我以て來往す可し。此の地の如きは、則ち須べからく兵士の首尾は絕えず、切に宜しく之に備うべし。故に下文に云く、「交地は、吾將に謹しみて其れ守らんとす」と。其の義を見る可し。  
杜佑曰く、交地には、數道の往來有りて、交通を絕つ可くも無し。  
梅堯臣は陳皥が註に同じ。  
何氏曰く、交地は、平原の交通なり。一に曰く、交を以て結ぶ可し（同盟すべし）、之を杜絕す（閉じて塞ぐ）可からず。之を絕てば隙に致る（塞ぎきれない）。又曰く、交通が四遠せば、遏絕（阻止禁绝）す可からず。吳王が孫武に問いて曰く「交地に、吾將に敵を絕むとす、得て來さしめず。必（ふくつ）に吾が邊城に令して其の守備を修め、通路を深絕し、其の隘塞を固めせしむ。若し先に之を圖らずんば、敵人が已に備え、彼が得て來る可く、吾は往くを得ず。眾寡は又均しくば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「既（ことごとく）に我は以て往く可からず、彼が以て來る可くば、吾は卒を分ちて之を匿し、守りて怠り易く、其の不能を示す。敵人が且（また）至らば、伏を設け廬に隱し、其の不意に出でば、以て功有る可し」と。  
張預曰く、地に數道有り、往來が通達し、而して阻絕す可らずは、是れ交錯の地なり。  
  
（諸侯之地三屬，）  
曹操曰く、我と敵とが相當り、而して旁に有る他國なり。  
孟氏曰く、鄭が齊、楚、晉に界すが若き、是なり。  
  
（先至而得天下之眾者，為衢地。）  
曹操曰く、先に至りて其の國の助を得るなり。  
李筌曰く、對敵の傍に、一國有りて之と屬と為すに、先に往きて之と通ぜば、其の眾を得るなり。  
杜牧曰く、衢地は、三屬の地。我は須べからく先に其の衝に至り、其の形勢に據り、其の旁國と結ぶべし。天下とは、猶諸侯を言うなり。  
梅堯臣曰く、彼我が相當り、旁國に三面の會有れば、先に至れば則ち諸侯の助を得るなり。  
王晳曰く、曹公が云う「先に至れば其の國の助を得る」とは、晳が謂わば、先に至るは、交を結びて先に至るなり。天下と言うは、能く廣く助くを謂い、則ち天下を從える可し。  
何氏曰く、衢地とは、地の要衝、數道に控帶し（引廻り）、先に此の地に據れば、眾は必ず之に從う。故に之を得れば則ち安く、之を失えば則ち危きなり。吳王が孫武に問いて曰く、「衢地は必ず先んずに、若し吾が道遠くして後に發せば、車を馳（か）り馬を驟（は）すと雖も、至るに先んずこと能わずんば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「諸侯が參屬すは、其の道は四通す。我と敵と相當れば、而して旁に他國有り。所謂先とは、必ず先に幣を重ね輕使し（迅速に使者す）、和を旁國と約し、親しく交り恩を結ぶ。兵が後に至ると雖も、眾は已に屬せり（派兵より先に同盟をしておけ）。我に眾助有れば、彼は其の黨を失う。諸國が犄角し（敵人を牽制或いは夾擊する、或いは相互に支援する）、震鼓して齊攻（一斉攻撃）せば、敵人は驚恐し、當るべき所を知ること莫し」と。  
張預曰く、衢は、四通の地。我が敵にする所は、其の一面に當り、而して旁に鄰國有り。三面は相い連り屬す。當に往きて之と結び、以て己を援すことを為すべし。先に至るとは、謂先に使を遣り以て幣を重ね旁國と和を約すことなり。兵が後に至ると雖も、已に其の國の助を得む。  
  
（入人之地深，背城邑多者，為重地。）  
曹操曰く、返すに難き地なり。  
李筌曰く、志堅きなり。白起が楚を攻め、樂毅が齊を伐つは、皆て重地と為（す）。  
杜牧曰く、人の境に已に深く入り、人の城を過ぐこと已に多く、津梁（船着き場と橋梁）は皆て恃む所と為り、要衝は皆て據る所と為り、師を還し旆（旌旗）を返すこと、得可（うべ）からず。  
杜佑曰く、返還し難きなり。背は去なり；「背」と「倍」とは同じ。多は道里の多なり。己に城郭を遠く去り、敵地に深く入れば、心を專（もはら）に意を一にす、之を重地と謂う。  
梅堯臣曰く、虛に乘じて入り、地を涉ること愈（いよいよ）深く、城を過ぐこと已に多く、津要（水陸の重要地）絕塞（極遠辺境の地方）にして、故に重難（厳重困難）の地と曰う。  
王晳曰く、兵が此に至れば、事勢（事の成行き；情勢）は重きなり。  
何氏曰く、重地とは、敵に入ること已に深く、國糧は資給に應ずこと難し。將士は掠めずんば何を取るや？吳王が孫武に問いて曰く、「吾は兵を引きて深く重地に入り、多くの所を逾越し、糧道は絕塞す。設（たと）え歸還を欲むとて、勢は過ぐ可からず、食を敵に欲して、兵を持して失わずには、則ち之を如何？」と。武の曰く、「凡そ重地に居れば、士卒は輕勇（素速く勇猛）にして、轉輸は通らず、則ち掠めて以て食を繼ぎ、下は粟帛を得て、皆て上に貢ぎ、多くば賞有りて、士卒に歸意は無し。若し還出を欲さば、即ち戒めて備を為し、溝を深くし壘を高くし、敵に且（また）久しきを示せ。敵が疑いて途を通さば、私に要害の道を除き、乃ち輕車に銜枚せしめて（口に木片をくわえさせ声をたてず）行かせ、牛馬を以て餌と為せ。敵人が若し出でば、鼓を鳴らして之に隨い、陰に吾が士を伏せ、之に中期を與え（頃合を見て）、內外相い應ぜば、其れ（敵が）敗れると知る可し」と。  
張預曰く、深く敵境を涉り、多く敵城を過ぐれば、士卒の心は專に、歸志の有ること無し、是れ退き難き地なり。司馬の景王が諸葛恪（しょかつかく）に謂いて卷甲（軽装で急進）し深く入り、其の鋒當る可からず（その勢いを止められない）とは是なり。  
  
（行山林、險阻、沮澤，凡難行之道者，為圮地。）  
曹操曰く、少しく固きなり。  
賈林曰く、經水して毀つ所（川が氾濫する所）を圮と曰う。沮洳（低湿の地）が圮地にして、久しく留るを得す、速（すみやか）に去るべし。  
梅堯臣曰く、水が毀つ所（川が氾濫する所）が圮、行けば則ち猶難く、況や戰うも守るも？  
何氏曰く、圮地とは、少固の地なり、城壘や溝隍（水のない堀）を為す可からずして、速に之を去るべし。吳王が孫武に問いて曰く、「吾が圮地に入り、山川は險阻にして、難從の道、行くこと久しく卒は勞し、敵は吾が前に在り、而して吾が後に伏し、營が吾が左に在り、而して吾が右を守る。良車と驍騎とが、吾が隘道を要（おびやか）す、則ち之を如何？」と。武の曰く、「先に輕車を進め、軍を去ること十里にして、敵と相候せば、險阻に接し期せ（あてにせよ）。或は分れて而して左に、或は分けて而して右に、大いに將に四觀（四方を観察）すべし。空を擇びて取り、皆て中道に會せば、倦（う）みて乃ち止む」と。  
張預曰く、險阻、漸洳（泥湿）の地、進退に艱難し、而して依る所無し。  
  
（所由入者隘，所從歸者迂，彼寡可以擊吾之眾者，為圍地。）  
李筌曰く、舉動し難きなり。  
杜牧曰く、出入に艱難し、易（たやす）く奇伏を設け勝を覆（くつがえ）すなり。  
杜佑曰く、從いて入る所は阨險にして、歸道は遠きなり。持久せば則ち糧乏しく、故に敵が少を以て吾が眾を擊つ可きを、圍地と為（す）なり。。  
梅堯臣曰く、山川圍繞し（取り巻いている）、入りて則ち隘なるは、歸るに則ち迂なり（曲折して遠い）。  
何氏曰く、圍地とは、入れば則ち隘險、歸るに則ち迂回、進退が從うこと無く、眾と雖も何ぞ用せむ？能く奇變を為せば、此の地に由る可し。吳王が孫武に問いて曰く、「吾は圍地に入り、前に強敵有りて、後に險難有り、敵は我が糧道を絕ち、我が走勢を利し（誘い）、敵は鼓譟して進まず、以て吾が能を觀る、則ち之を如何？」と。武の曰く、「圍地の宜は、必に其の闕を塞ぎ、往く所無きを示し、則ち軍を以て家と為し、萬人を同心させ、三軍は力を齊（ひと）しくし、幷（あわ）せて炊すこと數日、火煙を見わすこと無し。故に毀亂寡弱の形を為せば、敵人は我を見て、之に備うこと必ず輕し。則ち士卒に告勵し、其の奮怒を令し、良卒を左右の險阻に陳して伏せ、鼓を擊ちて出でよ。敵人に若し當れば、疾擊務突（素速く突撃）し、我は則ち前に鬬い後に拓き、左右は犄角（相互に支援）すなり」と。又曰く、「敵が吾が圍に在り、伏せて深謀し、我に示すに利を以てし、我に縈（めぐ）らすに旗を以てし、紛紜（多く雑然）として亂れるが若く、之く所を知らずんば、奈何？」と。武の曰く、「千人が旌を操り、分かれて要道を塞ぎ、輕兵が進みて挑むも、陳して搏つことなく、交して去ることなくば、此れ敗謀の法なり」と。  
張預曰く、前が狹く後が險の地は、一人で之を守り、千人向うこと莫し、則ち以て奇伏して勝つ。  
  
（疾戰則存，不疾戰則亡者，為死地。）  
曹操曰く、前に高山が有り、後に大水が有り、進みて則ち得ずんば、退きて則ち礙（さまたげ）有り。  
李筌曰く、阻山、背水、食盡は、速（すみやか）を利とし、緩（ゆるやか）を利とせず。  
杜牧曰く、衛公の李靖が曰く、「或は進軍行師すること有りて、鄉導に因らずんば、危敗に陷り、敵が制す所と為る。左は谷右は山は、馬を束ね車を懸く徑。前に窮し後に絕つは，鴈行魚貫の巖（厳しく隊列を固める）。兵が陳して未だ整わずして強敵に臨むこと忽れ。進みて憑る所無く、退きて固む所無くば、戰を求めて得ず、自ら守りて安らぐこと莫し。駐すれば則ち日月は稽留し（滞る）、動けば則ち首尾に敵を受く。野に水草無くば、軍は資糧に乏しく、馬は困し人は疲れ、智は窮し力は極まる。一人が隘を守れば、萬夫向うこと莫し。彼の要害の如きは、敵が先に之に據れば、此の利の如く、我は已に失守し（自陣を守れず）、縱（たと）え驍兵と利器を有（たも）ちても、亦、何を以てか其の用に施せようか？此くの若き死地では、疾く戰えば則ち存し、疾く戰わずんば則ち亡（ほろ）ぶ。當に須べからく上下が心を同じくし、併せて氣を一に力（つと）めるべし。抽腸濺血（腸を抜かれ血をしたたらせ）、一は前に死すも（前に戦う者がことごとく討ち死にするも）、敗に因りて功を為せば（敵も恐れて局面が転じ）、禍轉じて福と為す」此れ乃ち是なり。  
陳皥曰く、人が死地に在るは、漏船に坐し、燒屋に伏るが如し。  
賈林曰く、左右に高山、前後に絕澗（深谷の渓流）、外來は則ち易く、內出は則ち難し。誤りて此地に居れば、速に死戰を為せば則ち生く。士卒を待して氣が挫け、糧儲（食糧の貯え）又無くして持久すが若くは、死なずして何を待つ？  
梅堯臣曰く、前に進むを得ず、後に退くを得ず、旁に走（に）げるを得ずんば、速に戰わざるを得ず（戦うほかない）。  
何氏曰く、死地に力戰せば亦生く、守隅せば則ち死す。吳王が孫武に問いて曰く、「吾が師は境を出で、敵人の地に軍す。敵人は大いに至りて、我を數重に圍み、突いて以て出でんと欲（す）も、四塞され通れず。士を勵し眾を激し、之をして命を投ぜしめ圍を潰さむと欲（す）も則ち之を如何？」と。武の曰く、「溝を深くし壘を高くし、示すに守備と為し、安靜にして動くこと勿く、以て吾が能を隱せ。三軍に告令し、已を得ざるを示せ。牛を殺し車を燔（や）き、以て吾が士を饗し、糧食を燒き盡し、填夷井竈し（井戸を埋め竃を壊し陣屋を平らにする）、割髮捐冠（髪を切り冠を捨て）、絕去生慮（生きようとする思慮を絶ち切れ）。將に餘謀を無くし、士に死志有りとすべし。是に、砥甲礪刃（鎧を磨き矢石をはね返し刀を研ぎ鋭くし）。氣を幷せて一に力（つと）め、或には兩旁を攻め、震鼓疾譟（太鼓を轟かせ火急の歓声を挙げ）れば、敵人は亦懼れ、當る所を知ること莫し。銳卒を分けて行かせ、其の後を疾攻（速攻）させよ。此れ是は道を失いて而して生を求む。故に曰く、困し謀らずは窮し、窮して戰わざるは亡ぶ」と。吳王が曰く、「若し、吾が敵を圍めば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「山は峻谷は險にして、以て逾越すに難く、之を窮寇と謂う。之を擊つ法は、卒を伏せ廬を隱し、其の去道を開き、其の走路（逃げ道）を示せお。生を求めて透出すは、必に鬬意無く、因りて而して之を擊てば、眾と雖も必ず破る」と。『兵法』に又曰く、「若し敵人が死地に在り、士卒が勇氣ならば、擊たむと欲（す）法は、順いて抗す勿れ、陰（ひそか）に其の利を守り、必ず去道を開き、以て精騎を分ちて要路を塞ぎ、輕兵が進みて之を誘え。陳して戰うこと勿きは、敗謀の法なり」と。  
張預曰く、山川が險隘にして、進退は不能、糧は中に絕え、敵は外に臨み、此の際に當れば、士を勵まし決戰し、而して緩む可からず。  
  
（是故，散地則無戰，）  
李筌曰く、恐れて走げ散るなり。  
杜牧曰く、已に其の上に具（くわ）し。  
賈林曰く、地に關（大門）闥（小門）無く、卒は易く散走す。此の地に居るは、數戰す可からず（何度も戦うな）。地形の說は、一家の理。若し號令が嚴明ならば、士卒は受けて服し、死すも且（また）顧みず。何ぞ散すこと有らん？  
梅堯臣曰く、我が兵が國に在り、土に安んじ生を懷えば、陳して則ち堅からず、鬬いて則ち勝たず。是れ以て戰う可からず。  
王晳曰く、戰に決せば、則ち懼れて散る。  
張預曰く、士卒が生を懷（おも）えば、輕戰す可からず。吳王が孫武に問いて曰く、「散地に戰う可からず、則ち必（ふつく）に固く守りて出でず。若し敵が我が小城を攻め、吾が田野を掠（かす）め、吾が樵採を禁じ、吾が要道を塞ぎ、吾が空虛を待ち來りて急攻せば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「敵人が深く入り、專に輕鬬を志す。吾が兵は土に安んじ、陳して則ち堅からず、戰わば則ち勝たず。當に人を集め穀を聚め、城を保ち險に備え、輕兵で其の糧道を絕て。彼は戰を挑みて得ず、轉輸は至らず、野に掠む所無く、三軍は困して餒える。因りて之を誘えば、以て功有る可し。若し野戰を欲さば、則ち必ず勢に因り、險に依り伏を設けよ。險無くば則ち陰晦（陰暗）に隱れ、其の不意に出で、其の懈怠を襲え」と。  
  
（輕地則無止，）  
李筌曰く、恐れて逃ぐ。  
杜牧曰く、兵法の所謂輕地とは、軍を出し師を行し、始めて敵境に入り、未だ險要を背にせず、士卒は還るを思い、進むに難く退くに易く、以て入るに難きと為す、故に、輕地と曰う。當に必に精騎を選び、密に伏せる所有りて、敵人の卒が至らば、之を擊ちて疑を勿からしめよ。若し是至らずんば、逾（いよいよ）之（これ）速やかに去れ。  
杜佑曰く、志未だ堅からず、敵に遇う可からず。  
梅堯臣曰く、始めて敵境に入り、未だ險阻を背にせずんば、士の心は專（もはら）ならず、以て戰を為すこと無かれ。名城に近づく勿れ。通路に由る勿れ、以て速やかに進むを利と為せ。  
王晳曰く、故無くして、當に止まるべからず。  
張預曰く、士卒が輕返せば、輒留す可からず。吳王が曰く、「士卒が還るを思い、進むに難く退くに易く、未だ險阻を背にせず、三軍が恐懼せば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「軍が輕地に在り、士卒が未だ專（もはら）ならず、以て人に務を為し、以て戰を為すこと無かれ。故に、其の名城に近づくこと無く、其の通路に由ること無く、疑を設け佯惑し（逃げ去るとみせかけ）、將に去らむとすが若く示せ。乃ち精騎を選びて、銜枚（馬に轡をして）先に入りて、其の六畜を掠め。三軍は見得せば（見て取れば）、進みて乃ち懼れず。吾が良卒を分ち、密に伏せる所有れば、敵人が若し來れば、之を擊ちて疑う勿れ。若し其れ至らずんば、之を捨てて去れ」と。  
  
（爭地則無攻，）  
曹操曰く、攻むに當（あた）らずんば、當（まさ）に先に至りて利を為すべし。  
李筌曰く、敵が先に居り地が險しければ、攻む可からず。  
杜牧曰く、攻むこと無かれとは、敵人が若し已に先に其の地を得れば、則ち攻む可からずを言う。  
梅堯臣曰く、勝つ形の地は、先に據れば利。敵が若し已に其の處を得れば、則ち攻む可からず。  
張預曰く、攻むに當らずして之と爭うとは、當に後に發して先に至ることなり。吳王が曰く、「敵が若し先に至り、要に據り利を保ち、簡兵練卒（精鋭を選んで訓練を積み）、或いは出で或いは守り、我に備えるに奇を以てせば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「爭地の法は、之を讓る者が得、之を求む者が失う。敵が其の處を得れば、慎しみて之を攻むこと勿く、引きて佯（いつわり）て走（に）げ、旗を建て鼓を鳴らし、其の愛（いつくし）む所に趣き、柴を曳き塵を揚げて、其の耳目を惑わせよ。吾が良卒を分ち、密に伏せる所有りて、敵が必ず出で救う。人が欲せば我は與え、人が棄つれば我は取る。此れ爭先の道なり。若し我が先に至り、而して敵が此の術を用いば、則ち吾が銳卒を選び、固く其の所を守り、輕兵して之を追い、伏を險阻に分ち、敵人が還りて鬬えば、伏兵が旁に起る。此れが全勝（完全な勝利）の道なり」と。  
  
（交地則無絕，）  
曹操曰く、相い及びて屬すなり（相互に連なり一群となれ）。  
李筌曰く、間を絕つ可からず。  
杜牧曰く、廣く地が平ら、四面に交戰せば、須べからく車騎は部伍（部隊）を、首尾聯屬（前後連続）させ、之を斷絕せしめる可からず。敵人が因りて我に乘ずを恐る。  
賈林曰く、以て交結す可し、杜絕す可からず。之を絕てば隙を致す。  
杜佑曰く、相い及びて屬すなり。俱に進退す可し、以て兵は之を絕つ可からず。  
梅堯臣曰く、道は既に錯通し、其の邀截を恐る（何処から不意の敵が襲ってくるか分からない）。當に部伍に相及を令し、斷す可からず。  
王晳曰く、利は糧道なり。交は相い往來の地、亦、之を通地と謂う。高陽に居り以て敵を待てば、糧道を絕たれること無かるべし。  
張預曰く、往來の交通は、兵を以て其の路を阻絕す可からず。當に奇伏を以て勝つなり。吳王が曰く、「交地に、吾は將に敵を絕ち、來を得さしめず、必に吾が邊城に令して其の守備を修め、深く通道を絕ち、其の隘塞を固めしむ。若し先に之を圖らず、敵人が已に備え、彼が得て來る可く、吾は得て往けずんば、眾寡又均しければ、則ち之を如何？」と。武の曰く、「既に我が以て往く可からずんば、彼は以て來る可し。則ち卒を分けて之を匿し、守りて易く怠り、其の不能を示せ。敵人が且（また）至れば、伏を設け廬を隱し、其の不意に出でよ」と。  
  
（衢地則合交，）  
曹操曰く、諸侯と結べ。  
李筌曰く、結びて行うなり。  
杜牧曰く、諸侯とは、即ち上文に云う旁國なり。  
孟氏曰く、交を得れば則ち安んじ、交を失わば則ち危し。  
梅堯臣曰く、地が四通すと雖も、何を以てか天下の助を得るや。當に以て幣を重くして合す。  
王晳曰く、四通の境は、交援に非ずんば強からず。  
張預曰く、四通の地は、先に旁國と交り結ぶなり。吳王が曰く、「衢地は先を貴ぶ。若し吾が道遠くして後に發し、車を馳せ馬を驟せると雖も、至るに先を得ずんば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「諸侯が參屬し（三方向に居り）、其の道が四通せば、我と敵とが相い當れば、而して旁に他國有り。所謂る先とは、必に幣を重くし使を輕くし、旁の國と約し和し、親しく交りて恩を結ぶこと。兵が後に至ると雖も、眾は已に屬せり。簡兵練卒（精鋭を選んで訓練を積み）、利を阻（止）して處れば、我に眾助有りて、彼は其の黨を失う，諸國が犄角（相互支援）せば、敵人は當ること莫し」と。  
  
（重地則掠，）  
曹操曰く、糧食を畜積せよ。  
李筌曰く、敵境に深く入れば、義に非らざる可からずんば、人心を失う。漢の高祖は秦に入り、婦女を犯すこと無く、寶貨を取ること無くして、人心を得ること此の如し。（李）筌は「掠」字を以て「無掠」字と為す。  
杜牧曰く、言うは、重地に居り、進むに未だ利有らずんば、退きて復すことを得ずんば、則ち須べからく糧を運び、持久の計を為し、以て敵を伺うべし。  
孟氏曰く、糧を敵に因るなり。  
梅堯臣曰く、國を去ること既に遠く、多（さわ）に城邑を背にし、糧道が必（ふくつ）に絕えなば、則ち畜積を掠め以て食を繼げ。  
王晳曰く、敵境に深く入れば、則ち其の饒野（豊穣な田野）を掠め、以て豐儲（充分蓄積）すなり。難地は、食少なくば則ち危し。  
張預曰く、敵境に深入し、饋餉（軍糧）繼がずんば，當に士に勵して食を掠め、以て其の乏に備うべし。吳王が曰く、「重地に多に城邑を逾え、糧道は絕え塞がれ、設（たと）え歸還を欲すも、勢過ぐ可からずんば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「凡そ重地に居れば、士卒は輕勇（敏速で勇猛）なれど、轉輸は通らず、則ち掠して以て食を繼ぐ。下が粟帛を得て、皆て上に貢げば、多き者に賞を有せ。若し還り出づを欲さば、溝を深く壘を高くし、敵に且（また）久しきと示せ。敵が通途を疑えば、私（ひそか）に要害を除き、乃ち輕車に令し、銜枚して行かしめ、其の塵埃を揚げ、牛馬を以て餌とすべし。敵人が若し出でば、鼓を鳴らして之に隨い、陰に吾が士を伏せ、之に中期を與え（頃合を見て）、內外相應ぜば、其れ敗れると知る可し」と。  
  
（圮地則行，）  
曹操曰く、稽留（停留）すること無れ。  
李筌曰く、溝隍（塹壕）を為す可からず、急（すみやか）に之を去るべし。  
梅堯臣曰く、既に圮を毀（こぼ）てば依り止る可からず、則ち當に速行すべし、稽留すること勿れ。  
王晳曰く、軍眾を合せ聚め、圮には舍止すこと無し。  
張預曰く、難行の地には、稽留す可からず。吳王が曰く、「山川は險阻にして、難從の道、行くこと久しければ卒は勞す。敵が吾が前に在り、而して吾が後に伏す。營が吾が左に在り、而して吾が右を守る。良車驍騎が吾が隘道に要（待ち伏せる）さば、則ち之を如何？」と。武の曰く「先ず輕車を進め、軍を去ること十里、敵と相い候い、險阻に接し期せ（あてにせよ）。或は分れて左し、或は分れて右し、大いに將に四觀し、空を擇びて取り、皆て中道に會せば、倦（う）みて乃ち止む」と。  
  
（圍地則謀，）  
曹操曰く、奇謀を發せよ。  
李筌曰く、智者は困せず。  
杜牧曰く、難阻の地は、敵と相い持せば、須べからく奇險詭譎の計（突拍子も無く目眩ましな策）を用いよ。  
杜佑曰く、此に居れば、當に權謀（術策を駆使し）詐譎す（偽り欺く）べし、以て難を免がる可し。  
梅堯臣曰く、前に隘有り、後に險有り、歸道は又迂ならば、則ち謀慮を發し以て勝を取れ。  
張預曰く、難には力を以て勝ち、易には謀を以て取れ。吳王が曰く、「前に強敵有り、後に險難有り、敵は我が糧道を絕ち、我に走勢を利し、彼は鼓譟して進まず、以て吾が能を觀るならば、則ち之を如何？」と。武の曰く、「圍地は、必ず其の闕を塞ぎ、往く所無きを示さば、則ち軍を以て家と為し、萬人が同心せば、三軍は力を齊（そろ）え、幷（あわ）せて炊すこと數日、火煙を見わすこと無し。故に毀亂寡弱の形を為せば、敵人は我を見て、之に備うこと必ず輕し。則ち士卒に告勵し、其の奮怒を令し、良卒を左右の險阻に陳して伏せ、鼓を擊ちて出でよ。敵人に若し當れば、疾擊務突（素速く突撃）し、我は則ち前に鬬い後に拓き、左右は犄角（相互に支援）すなり」と。  
  
（死地則戰。）  
曹操曰く、死戰を殊（決心）せよ。  
李筌曰く、死戰を殊し、生を求めず。  
陳皥曰く、死地に陷在せば、則ち軍中の人人自ら戰う。故に曰く、「之を死地に置けば而して後に生く」と。  
賈林曰く、力戰せば或は生く、守隅せば（囲まれた所を守るなら）則ち死す。  
梅堯臣曰く、前後左右に之（ゆ）く所無し、必死を示せば、人人自ら戰う。  
張預曰く、死地に陷在せば、則ち人は自ら戰を為（す）。吳王が曰く、敵人は大いに至りて、我を數重に圍み、突いて以て出でんと欲（す）も、四塞され通れず。士を勵し眾を激し、之をして命を投ぜしめ圍を潰さむと欲（す）も則ち之を如何？」と。武の曰く、「溝を深くし壘を高くし、示すに守備と為し、安靜にして動くこと勿く、以て吾が能を隱せ。三軍に告令し、已を得ざるを示せ。牛を殺し車を燔（や）き、以て吾が士を饗し、糧食を燒き盡し、填夷井竈し（井戸を埋め竃を壊し陣屋を平らにする）、割髮捐冠（髪を切り冠を捨て）、絕去生慮（生きようとする思慮を絶ち切れ）。將に餘謀を無くし、士に死志有りとすべし。是に、砥甲礪刃（鎧を磨き矢石をはね返し刀を研ぎ鋭くし）。氣を幷せて一に力（つと）め、或には兩旁を攻め、震鼓疾譟（太鼓を轟かせ火急の歓声を挙げ）れば、敵人は亦懼れ、當る所を知ること莫し。銳卒を分けて行かせ、其の後を疾攻（速攻）させよ。此れ是は道を失いて而して生を求む。故に曰く、困し謀らずは窮し、窮して戰わざるは亡ぶ」と。  
  
（所謂古之善用兵者，能使敵人前後不相及，）  
梅堯臣曰く、奇を設け衝掩す（突撃して不意を襲う）。  
  
（眾寡不相恃，）  
梅堯臣曰く、之を驚撓（きょうどう）す（不安を与え乱す）なり。  
  
（貴賤不相救，）  
梅堯臣曰く、散亂すなり。  
  
（上下不相收，）  
梅堯臣曰く、倉惶（そうこう）す（慌てふためく）なり。  
  
（卒離而不集，兵合而不齊。）  
李筌曰く、變を設けて以て之を疑わしめ、左を救うに則ち其の右を擊ち、惶（あわ）て亂れて計す暇（いとま）なさしむ。  
杜牧曰く、多く變詐を設け、以て敵人を亂す。或は前を衝（つ）き後を掩（おそ）う、或は東を驚かせ西を擊つ、或は僞形を立て、或は奇勢を張り、我は則ち無形にして以て合戰せば、敵は則ち必ず備えて眾を分つ。其の意を懾（おび）えさせ離散せしめ、上下が驚き擾え、能く和合せしめず、齊集せしめ得ず。此れ善く兵を用うなり。  
孟氏曰く、多く疑事を設け、東に出で西に見（あら）われ、南を攻め北に引く、彼を狂惑散擾せしめ、而して集聚を得させず。  
梅堯臣曰く、或は已に離れて集う能わず、或は合すと雖も齊すこと能わず。  
王晳曰く、將に優劣有りて則ち然り、要は奇正相生ずに在りて、手足相應ず。  
張預曰く、其の不意に出で、其の無備を掩い、驍兵銳卒が猝然として突擊す。彼前を救えば則ち後は虛、左に應ぜば則ち右は隙く。倉惶散亂せしめ、禦ぐ所を知らず。將吏士卒は、相赴くこと能わず。其の卒は已に散じて復た聚らず、其の兵合すと雖も一なること能わず。  
  
（合於利而動，不合於利而止。）  
曹操曰く、之を暴して離れせしめ、之を亂して齊しせしめずして、兵を動かして戰え。  
李筌曰く、之を撓（どう）し、利を見（あら）わしめば乃ち動き、亂れずんば則ち止む。  
梅堯臣曰く、然して能く敵をして此の若くせば、當に須べからく利有らば則ち動き、利無くば則ち止む。  
張預曰く、彼が驚擾すと雖も、亦當に利有らば則ち動き、利無くば則ち止む。  
  
（敢問：敵眾整而將來，待之若何？）  
曹操曰く、或（あるひと）問うなり。  
梅堯臣曰く、此の疑を設くは、自問を以てす。言うは、敵人が甚しく眾にして、將に又嚴整、我は何を以てか之を待つやと。  
張預曰く、前所に陳ぶは、須べからく兵が敵に眾して、然る後に為す可しと。故に或る人、武に問いて曰く、「彼の兵は我より眾にして又整肅なり、則ち何の術を以て之を待つや？」と。  
  
（曰：先奪其所愛，則聽矣。）  
曹操曰く、其の恃む所の利を奪え。若し先に利地に據れば、則ち我の欲す所を必ず得よう。  
李筌曰く、孫子が此の問を立つ故は、此を以て祕要（秘密緊要）と為すなり。愛す所とは，敵が便（まさしく）愛す所を謂うなり。或は財、帛、子女。吾が先ず之を困辱（困窮侮辱）せば、則ち敵は進退すを皆て聽（したがう）なり。  
杜牧曰く、我が便地に據り、我が田野を略（経略；治めること）し、其の糧道を利す。斯の三者は、敵人の愛惜、倚恃（依存し頼る）す所のものなり。若し能く俱に之を奪えば、則ち敵人強しと雖も、進退勝敗の皆は須べからく我に聽うなり。  
陳皥曰く、愛とは、恃み利す所に止まらず、但に敵人が顧（かえりみ）る所の事であれば、皆て奪う可し。  
梅堯臣曰く、當に先ず其の顧み愛す所を奪うべし、則ち我が志得て行えば、然る後に其れ驚撓散亂せしむれば、至らざる所無し。  
王晳曰く、先ず利地に據り、奇兵を以て其の糧道を絕てば、則ち我が謀の如し。  
張預曰く、武の曰く、「敵が愛す所は、便地と糧食のみ。我が先に之を奪えば、則ち我に從わざる計は無し」と。  
  
（兵之情主速，乘人之不及，由不虞之道，攻其所不戒也。）  
曹操曰く、孫子は難に應じ、陳兵情を覆うを以てす（困れば陣や兵の情勢を覆い隠せ）。  
李筌曰く、不虞不戒は敵の速を破る（相手が予期せず警戒せぬ所を攻めれば相手の進軍は止る）。  
杜牧曰く、此れ兵の情狀を統言す（まとめて言う）、以て敵の間隙に乘じ、不虞の道に由り、其の不戒の處を攻める。此れ乃ち兵の深情、將にかくなせば事に至るなり。  
陳皥曰く、此れ言うは、敵人の不及、不虞、不戒の便有るに乘じ、則ち須すからく速進し、遲疑す可からず。蓋し孫子の旨は、用兵は疾速を貴しとするを言う。  
梅堯臣曰く、機は速を貴しとす、當に人の不備に乘ず。人の不備に乘ずとは、不虞の道を行き、不戒の所を攻むなり。  
王晳曰く、兵は神速を上とし、愛すを奪うを尤（ゆう；すぐれている）となすは當然なり。  
何氏曰く、蜀將の孟達が魏に降るが如し。魏朝は達（孟達）を以て新城太守を領せしむ。達は復（また）吳固を連ね蜀を固め、中國を潛かに圖（たくら）む。謀は洩れ、司馬宣王が秉政（政権を掌握）すると、達を恐れ速やかに發し、書を以て達に紿い以て之を安んず。達は書を得て、猶與（ゆうよ）して決らず。宣王は乃ち軍を潛め進みて討つ。諸將皆てが達と二賊が交構（交合）すと言い、宜は審びらかに察して後に動く。宣王の曰く、「達に信義無し。此れ其れ相い疑う時なり。當に其れ未だ定らずに及べば、往きて之を討つべし」と。乃ち倍道兼行（倍の速度で行軍）し、八日にして其の城下に到る。吳と蜀は各（おのおの）其の將を遣し、西城の安橋、木闌塞に向い以て達を救わんとし、宣王は諸將を分けて之を拒む。初め、達と諸葛亮は書して曰く、「宛は洛を去ること八百里。吾を去ること一千一百里、吾を聞きて事を舉ぐに、當に表を天子に上げ、相い反覆する比（ころ）は、一月間とすべし。則ち吾が城は已に固く、諸軍は足辦（充分に整備）し、在る所は深く險しく、司馬公は必ずや自ら來たらず。諸將が來りても、吾に患無からむ」と。兵が到るに及びて、達は又亮に告げて曰く、「吾が事を舉げて八日にして兵は城下に至る。何たる其の神速なるや！」と。上庸城は三面阻水にして（三方が河川で遮られ）、達は城下に木栅を為し以て自ら固めり。宣王は水を渡り、其の栅を破り、直に城下に造（いた）り、八道で之を攻め、旬有六（16）日にして、達の甥の鄧賢、將の李輔等は門を開きて出でて降り、遂に達を斬る。李靖が蕭銑（しょうせん）を征すに、兵を夔州に集む。銑は時が秋潦（長雨増水の季節）に屬し、江水が泛漲し、三峽路が陷なる（ぬかるむ）を以て、必ずや靖は進むこと能わずと謂い、遂に兵を休め備を設けず。九月に、靖は乃ち師を率いて進み、將に峽に下り、諸將は皆て兵を停め水が退くを待つべしと請う。靖の曰く、「兵は神速を貴とす、機を失う可からず。今、兵が集り始むを、銑は尚未だ知らず。若し、水漲の勢に乘じ、倏忽（たちまち）に城下に至らば、所謂「疾雷は淹耳に及ばず」、此れ兵家の上策。縱（よしんば）彼が我を知りて、倉卒（あわてて）徵兵すれど、以て敵に應ずこと無し。此れ必ず擒（とりこ）と成さん」と。遂に蕭銑を降す。『衛公兵法』に曰く、「兵は上神（精鋭）を用い、戰は其れ速を貴しとす。士卒を簡練（選択して訓練）し、號令を申明（鄭重に説明）し、其の目には以て幟（のぼり）を麾（なび）かせ曉らかにし、其の耳には以て金（ｼﾝﾊﾞﾙ）を鼓して習（な）らし、賞罰を嚴しくし以て之を誡め、芻豢（牛馬と犬豚）を重んじ以て之を養い、溝塹を浚（さら）い以て之を防ぎ、山川を指して以て之を導き、才能を召して以て之に任せ、奇正を述べて以て之に教える。此の如くせば、則ち敵人に雷電の疾有りと雖も、而して我は則ち待む所有るなり。若し兵に先に備え無くば、則ち應卒せず、卒が應ぜずんば、則ち機に失い、機に失なえば、則ち事に後（おく）れる。事に後れば、則ち勝を制せずして軍は覆（くつがえ）る」と。故に、『呂氏春秋』に云く、「凡そ兵は、急捷（迅速）を欲す。一に決して勝を取る所以、久しくす可からずして之を用いん」と。或に曰く、兵の情が主速と雖も、人の及ばざるに乘ぜよ。然り敵將が多謀にして、戎卒（兵卒）が輯睦（內外同心）し、令行禁止（命令は行われ禁止は行われない：法令厳正）で、兵利甲堅（鋭利な兵器と堅固な鎧）で、氣は銳く嚴しく、力は全きにして勁（つよ）ければ、豈に速にして之を犯す可きや、と。答えて曰く、此の若きは、則ち當に卷迹藏聲（退き隠れて音をたてるな）、蓄盈待竭（部隊の鋭気を蓄え相手の鋭気が衰えるを待て）、其の鋒勢を避け、其れ持久を與（ほどこ）せ、安んぞ之を犯す可きや？廉頗（れんぱ）の白起を拒み、守りて戰わず。宣王の武侯に抗して、抑えて進まざるは是なり。  
張預曰く、復（また）或人に謂りて曰く、用兵の理は、惟れ神速を尚ぶ。貴ぶ所の速とは、人の倉卒に乘じ、備を為すに及ばざらしむ。兵を不虞の徑に出し、以て其の不戒を掩（おそ）う、故に敵は驚き擾い散亂す、而して前後は相い及ばず，衆寡は相い待まず。  
  
（凡為客之道：深入則專，主人不克；）  
李筌曰く、夫れ客と為り、深く入れば則ち志堅く、主人は禦ぐこと能わず。  
杜牧曰く、言うは、大凡（およそ）攻伐の道を為すに、若し敵人の境に深く入れば、士卒に必死の志有りて、其の心は專ら一なれば、主人は我に勝つこと能わず。克は勝なり。  
梅堯臣曰く、客と為らば、人の地に入ること深し。則ち士卒は專ら精し、主人は我に克つこと能わず。  
張預曰く、敵境を深く涉（通過）せば、士卒の心は專らにして、則ち主と為る者は勝つこと能わず。客は重地に在り、主は輕地に在るが故のみ。趙廣武君が、「韓信は國を去ること遠くして鬬い、其の鋒當る可からず」と謂うは是なり。  
  
（掠於饒野，三軍足食；）  
王晳曰く、饒野とは多く稼穡（農産物が豊かな野）。  
  
（謹養而勿勞，併氣積力；運兵計謀，為不可測。）  
曹操曰く、士を養い氣を併せて、兵を運（用）し、度（量）を測る可からざる計を為す。  
李筌曰く、氣は盛んに力を積み、之に加えるに謀慮を以てせば、則ち敵の測る可きに非ず。  
杜牧曰く、斯れ言うは、敵人の境に深く入り、須べからく田野を掠め、我をして食を足らしむ。然る後に、壁を閉じて之を養い、勞苦せしめること勿かれ。氣を全くし力を盛んにし、一たび發せば勝を取る。動けば變化を用い、敵人をして我を測ること能わざらしむ。  
陳皥曰く、處る所の野は、須べからく水草の便が近く、積蓄して乏しからず。其の來往を謹しみて、善く士卒を撫（な）でよ。王翦が楚を伐つに、楚人が戰を挑めば、翦は出でず。撫御（慰撫統御）に勤め、兵を幷せ力を一にす。士卒が石を投げ戲を為すと聞き、其れ勇を養い戰うを思うと知る。然して後に之を用い、一舉にして遂に楚を滅す。但に、敵境に深く入り、未だ勝つ可き利見えずんば、則ち須べからく此の計を為すべし。  
梅堯臣曰く、其れ富饒を掠め、以て軍食を足らしむ。人の力を息（やす）ませ、兵を幷せ測る可からずの計を為す。  
王晳曰く、謹みて養う。謂うは、撫循（安撫）し飲食すること周（あまね）く之を謹むなり。銳氣を幷せ、餘力を積み、形を藏し謀を密かにし、敵をして測らしめず、其の勝つ可き隙有るを俟ち、則ち進め。  
張預曰く、兵が重地に在れば、須べからく糧を富饒の野に掠め、以て吾が食を豐にすべし。乃ち壁を堅めて自らを守り、勤めて士卒を撫で、任ずに勞苦を以てすること勿れ。氣を盛んに力を全きにせしめ，常に度を測る可からずの計を為す。敵を伺い擊つ可きなれば、則ち一舉にして克つ。王翦が荊を伐つに、常に此の術を用う。  
  
（投之無所往，死且不北，）  
李筌曰く、能く其の力を得れば、之を往くこと無き地に投ず。  
杜牧曰く、之を往く所無きに投ずとは、前後進退皆て之（ゆ）く所無きを謂い、士は此を以て皆て力戰を求め、死すと雖も北（に）げず。  
梅堯臣曰く、必戰の地に置きて在れば、死を知りて退走せず。  
張預曰く、之を危地に置き、左右前後皆て往く所無くば、則ち守戰せば死に至りて奔北せず（逃げ去ることができない）。  
  
（死焉不得，）  
曹操曰く、士が死、安んぞ得ざらん（必ず得る）。  
杜牧曰く、士が必死ならば、安んぞ勝の理を得ざらむこと有るや？（必ず得る）を言う。  
孟氏曰く、士が死、得ざること無し。  
梅堯臣曰く、兵焉ぞ得て命を用いざらん？  
張預曰く、士卒が死戰せば、安んぞ志を得ざらん？尉繚子が曰く、「一賊が劍を仗（も）ちて市に擊てば、萬人が之を避けざること無しとは、一人の獨勇に非らず。萬人は皆て不肖なり（分からないだろうが），必死と必生とは不侔なり（同じじゃない）」と。  
  
（士人盡力。）  
曹操曰く、難地に在れば、心幷（あわ）す。  
梅堯臣曰く、士が安んぞ得て力を竭さずして以て戰に赴くや？  
王晳曰く、人が死地に在りて、豈に力を盡さざる？  
何氏曰く、獸は困して猶鬬う、烏は窮して則ち啄（つつ）く、況や萬物に靈す者、人をや？  
張預曰く、同じく難地に在らば、安ぞ得て共に其の力を竭さざる？  
  
（兵士甚陷則不懼，）  
杜牧曰く、危險に陷り、勢が獨死ならずば、三軍は心を同じくし、故に懼れず。  
梅堯臣、杜牧が註に同じ。  
王晳曰く、之を難地に陷らさば則ち懼れず、懼れずんば則ち鬬志は堅し。  
張預曰く、危亡の地に陷りて在れば、人は必死の志を持つ、豈に復（また）敵を畏れるや？  
  
（無所往則固，深入則拘，）  
曹操曰く、拘は縛なり。  
李筌曰く、固は堅なり。  
杜牧曰く、往は走なり。言うは、敵境に深く入り、走（に）げて生路無くば、則ち人心は堅固にして拘縛（束縛）者の如きなり。  
梅堯臣曰く、往く所無きに投ぜば、則ち自然に心固る。入ること深ければ、則ち自然に志は專（もはら）なり。  
張預曰く、動きて之く所無くば、人心は堅固。兵が重地に在り、走げて適く所無くば、則ち拘係（拘束）の如し。  
  
（不得已則鬬。）  
曹操曰く、人は窮せば則ち死戰す。  
李筌曰く、命を決す。  
杜牧曰く、已（や）むを得ざる者、皆疑いて死地に陷りて在れば、必ず生きず。死を以て死を救う。已を得ざるを盡すなり。則ち人皆悉く力して鬬うなり。  
梅堯臣、何氏は杜牧が註に同じ。  
張預曰く、勢已むを獲ずんば、須べからく力鬬すべし。  
  
（是故，其兵不修而戒，不求而得，不約而親，不令而信，）  
曹操曰く、其の意を求索せずとも、自（おのづか）ら力を得る。  
李筌曰く、之を必死に投ぜば、令せずして其の用を得る。  
杜牧曰く、此れ言うは、兵は死地に在れば、上下志を同じくし、修整（整え直す）を待たずして自ら戒懼し、收索（催促／要求）を待たずして自ら得心し、約令を待たずして自ら親信すなり。  
孟氏曰く、其れ勝を求めずして勝ちを自ら得る。  
梅堯臣曰く、修めずして兵は自ら戒め、索せずして情を自ら得、約せずして衆は自ら親しみ、令せずして入り自ら信じ、皆て危難に陷る所以、故に三軍は心を同じくす。  
王晳曰く、死難の地を謂い、人心は自ら然る故なり。  
張預曰く、危難の地、人は自ら力を同じ、修整せずして自ら戒め慎み、求索せずして情意を得、約束せずして上に親しみ、號令せずして命を信ず。所謂舟を同じくして濟（わた）る、則ち吳越何んぞ平異心を患わん？（危機を回避する心は変わらない）  
  
（禁祥去疑，至死無所之。）  
曹操曰：禁妖祥の言、疑惑を去る計。  
一（あ）る本に「死に至れば災（わざわい）とする所無し」と作（す）。  
李筌曰く、妖祥の言、疑惑の事、而して之を禁ず。故に災とする所無し。  
杜牧曰く、黃石公の曰く、「巫祝を禁じ、得て吏士に軍の吉凶を卜問為さしめず」と。軍士の心を恐亂す。言うは、既に疑惑の路を去れば、則ち士卒は死に至りて異志有ること無きなり。  
梅堯臣曰く、妖祥の事は作（な）さず，疑惑の言に入らずば、則ち軍は必ず亂れず、死して後に已（や）む。  
王晳曰く、災は神異の樣であり、有れば以て人を惑わす。故に之を禁止す。  
張預曰く、士に死戰を欲さば、則ち軍吏に禁止して得て妖祥の事を言わせず、衆を恐惑せしめず。疑惑を去る計とは、則ち死に至れば他慮すること無し。『司馬法』に曰く、「厲祥（凶吉）を滅せよ」此の謂なり。倘（も）し士卒に未だ必戰の心有らずば、則ち亦、妖祥を假り以て衆を使う者有り。田單が即墨を守るに、一卒に命じ神と為し、出入する每に約束し、必ず神と稱し、遂に燕を破るは是なり。（鳥の集まる不吉を神の到来の前兆とし、ある兵を神に仕立てて田単はこれに従う形をとり、衆を軍令に従わせた故事）  
  
（吾士無餘財，非惡貨也；無餘命，非惡壽也。）  
曹操曰く、皆て財物を燒焚すは、惡貨の多きに非ず。財を棄て死に致るは、已（や）むを得ざるなり。  
杜牧曰く、若し財貨有れば、恐るらくは士卒は顧戀し、苟しくも生の意有りて、必死の心無きなり。  
梅堯臣曰く、已むを得ず、財貨を竭（つく）す。已むを得ず、死戰を盡（つく）す。  
王晳曰く、用を足すのみ。士は財富を顧みれば則ち生を媮（ぬす）む（こっそり生き残ろうとする）。死戰のみ。士は生路を顧みれば則ち鬬志無からむ。  
張預曰く、貨と壽とは、人の愛（いつく）しむ所なり。財寶を燒き擲す（投げ捨てる）所以は、性命を割棄す（あきらめる）もの、之を憎惡すに非ず、已むを得ざるなり。  
  
（令發之日，士卒坐者涕霑襟，偃臥者涕交頤。）  
曹操曰く、皆て必死の計を持す。  
李筌曰く、財と命とを棄て、必死の志有れば、故に感じて涕（なみだ）流るなり。  
杜牧曰く、士は皆て死を以て約を為す。未だ戰わざる日に、先ず令して曰く、「今日の事、此れ一舉に在り！若し用命せずんば（命令を執行しないなら）、身は草野を膏（こ）やし、禽獸の食（くら）う所と為さん」と。  
梅堯臣曰く、決すに死力を以てす、牧の說は是なり。  
王晳曰く、感勵の使然（発奮激励のしからしめるもの）。  
張預曰く、之に感激し、故に涕泣す。未だ戰わざる日、先ず令して曰く、「此れ一舉に在り！若し用命せずんば、身は草野を膏やし、禽獸の食う所と為さん」と。或に曰く、凡そ行軍し士を饗すに酒を使（もち）い、劍を拔きて舞に起（た）ち、朋と角抵（力比べ）を作（な）し、鼓を伐（う）ち叫呼す（大声で叫ぶ）は、其の氣を增す所以。若し令して涕泣せば、無乃（むしろ）其の壯心を挫（くじ）かむか？答えて曰く、先ず其の死力を決し、後に其の銳氣を激せば、則ち勝たざること無し。儻（も）し必死の心無くば、其の氣盛んと雖も、何に由りて之に克たん？荊軻が易水に於けるが若き、士は皆て淚を垂れ涕泣す。復た羽聲（激した音声）を為し忼慷（意気激昂）に及べば、則ち皆は目を瞋し（憤りてかっと目を見開き）、髮は上りて冠を指す（髪が立ち上がる）とは是なり。  
  
（投之無所往者，諸、劌之勇也。）  
李筌曰く、夫れ獸が窮せば則ち搏す（挑みかかる）、烏が窮せば則ち啄（つつ）く、急迫せしむは、則ち專諸（せんしょ）、曹劌（そうかい）の勇なり。  
杜牧曰く、言うは、投ず所の處（処置）は、皆て專諸、曹劌の勇を為せ。  
梅堯臣曰く、既に以て必死を令せば、則ち往く所皆て專諸、曹劌の勇有るべし。  
張預曰く、人は必死を懷かば、則ち向う所は皆て專諸、曹劌の勇有り。專諸，吳の公子光が吳王の僚を刺殺せしめた者；劌は當に沫と為すべし。曹沫は勇力を以て魯の莊公に事（つか）え、嘗て匕首を執りて、齊の桓公を劫（おど）す。  
  
（故善用兵者，譬如率然；）  
梅堯臣曰く、相應ずこと容易なり。  
  
（率然者，常山之蛇也。擊其首則尾至，擊其尾則首至，擊其中則首尾俱至。）  
梅堯臣曰く、蛇の物を為すなり、擊つ可からず。之を擊てば、則ち率然として（にわかに）相應ず。  
張預曰く、率は猶速のごとし。之を擊てば則ち速然（すぐさま）相應ず。此れ陳法に喻うなり。『八陳圖』に曰く、「後を以て前と為し、前を以て後と為す。四頭にして八尾、觸れる處を首と為し、敵が其の中を衝けば、首尾が俱に救う」と。  
  
（敢間：兵可使如率然乎？）  
梅堯臣曰く、使兵をして首尾が率然として相應ぜしむこと一體が如き可なりや？  
  
（曰：可。夫吳人與越人相惡也，當其同舟而濟，遇風，其相救也如左右手。）  
梅堯臣曰く、勢が之をして然らしむ。  
張預曰く、吳と越とは仇讎なり。同じく危難に處せば、則ち相い救うこと兩手の如し。況んや仇讎者に非ずんば、豈に猶率然として相應じざらんがごときか？  
  
（是故，方馬埋輪，未足恃也；）  
曹操曰く、方は馬を縛るなり。輪を埋めるは、不動を示すなり。此れは、專難（方馬埋輪すこと）は權巧（權宜善巧）に如かざるを言う。故に曰く、方馬埋輪すと雖も、恃むに足らず。  
李筌曰く、兵を往く所無き地に投ぜば、人は自から鬬うこと、蛇の首尾の如し。故に吳越の人が同舟して相救う。縛馬埋輪すと雖も、未だ恃むに足らず。  
杜牧曰く、馬を縛るは方陳を為さしむ、輪を埋るは不動をせしむ。此くの如くと雖も、亦、未だ專固を足稱し（防御を固めたと言い難く）恃むに足らず。須べからく權變に任せ、士を必死の地に置けば、人をして自から戰わしめ、相い救うこと兩手のごとし。此れ乃ち守固必勝の道にして恃むに足る。  
陳皥曰く、人が相い惡（にく）むこと、吳越より甚しきは莫し。同舟して風に遇えば、猶相い救うがごときは、何則（なんぞや）？勢が之を然らしむ。夫れ用兵の道は、若し、必戰の地に陷いりて在れば、俱に死す憂いを懷かしめ、則ち首尾前後が、相い救わざるを得ざる。吳越の惡有りて、猶兩手が相救うがごとし。況んや吳越の惡無をや？蓋し、言うは、設變に之をせしむを貴しとせば、則ち勇怯の心一なり。  
梅堯臣は杜牧が註に同じ。  
王晳曰く、此れが謂うは、難地に在れば自から相い救うのみ。蛇の首と尾、人の左右の手、皆て相い救うことの敏に喻える。同舟して濟（わた）る、險難在れば、吳越に猶異心無きがごとし、況んや三軍においてをや？故に、其れ恃むに足ること、方馬埋輪より甚し。曹公が說くは是なり。  
張預曰く、上文に歷言すは兵を死地に置き、人心をして專固せしめることである。然れども此れ未だ善しと為すに足らず。之を危地に置くと雖も、亦、須べからく權智を用うべし。人に令して左右の手の如く相い救わしめれば、則ち勝たむ。故に曰く、縛馬埋輪すと雖も、未だ恃むに足らず、固して以て勝を取る。必ず恃む可き所は、卒をして相い應ずこと一體の如きを要せしむ。  
  
（齊勇若一，政之道也。）  
李筌曰く、勇を齊（ととの）うは、將の道。  
杜牧曰く、正しく勇敢を齊えば、三軍は一の如く、此れ皆て為政者に在り。  
陳皥曰く、政令が嚴明であれば、則ち勇者は獨り進むを得ず、怯者は獨り退くを得ず、三軍の士一の如し。  
梅堯臣曰く、人をして勇を齊わしめること一心にして怯者無きが如きは、軍政の道を得たる。  
王晳は梅堯臣が註に同じ。  
張預曰く、既に之を危地に置き、又、之をして相い救わしむれば、則ち三軍の眾は、力を齊え勇を同じくし一夫の如し、是れ軍政が其の道を得たる。  
  
（剛柔皆得，地之理也。）  
曹操曰く、強弱は一に勢なり。  
李筌曰く、剛柔を得るは、地の勢に因る。  
杜牧曰く、強弱の勢は、須べからく地形に因りて之を制す。  
梅堯臣曰く、兵に強弱無く、皆て用を得るは、是れ地の勢に因る。  
王晳曰く、剛柔とは猶強弱のごとし。言うは、三軍の士、強弱は皆て其の用を得るは、地の利が之を然（しか）らしむ。曹公曰く、「強弱は一に勢」是なり。  
張預曰く、地の利を得れば、則ち柔弱の卒は、亦、以て敵に克つ可し、況や剛強の兵をや？剛柔、其の用を俱え獲るは、地勢が之を然らしむ。  
  
（故善用兵者，攜手若使一人，不得已也。）  
曹操曰く、齊一の貌なり。  
李筌曰く、眾を理（おさ）むこと寡を理むが如し。  
杜牧曰く、言うは、三軍の士をして、一夫の手を牽（ひ）くが如し。已むを得ずして、皆て須べからく我の命に從う、喻易なり（分かり易い）。  
賈林曰く、攜手は翻迭（入れ替わる）の貌、回運に便（利）。前を以て後と為し、後を以て前と為し、左を以て右と為し、右を以て左と為す。故に百萬の眾が一人の如し。  
梅堯臣曰く、三軍を用い攜手使一人の如しとは、勢の已むを得ずして、自然（おのづ）から皆て我が（指）揮す所に從うなり。  
王晳曰く、左右前後を攜えしめば、我に率從す。  
張預曰く、三軍は眾と雖も、一人の手を提（ひ）くが如く之をしむ。齊一を言う。故に曰く、將の揮す所、從移せざるは莫し。將の指す所、前に死せざるは莫し。  
  
（將軍之事：靜以幽，正以治。）  
曹操曰く、清淨、幽深、平正を謂う。  
杜牧曰く、清淨にして簡易，幽深にして測り難く、平正にして偏（かたよ）ること無し、故に能く治に致る。  
梅堯臣曰く、靜にして幽邃（かすかで奥深い）、人は測ること能わず。正にして自から治り、人撓（みだ）すこと能わず。  
王晳曰く、靜なれば則ち撓（たわ）まされず、幽なれば則ち測られず、正なれば則ち媮（ごまか）されず、治なれば則ち亂されず。  
張預曰く、其れ事を謀れば、則ち安靜にして幽深、人は測ること能わず。其れ下を（統）御さば、則ち公正にして整い治まり、人は敢えて慢せず。  
  
（能愚士卒之耳目，使之無知。）  
曹操曰く、愚は誤なり。民は與（とも）に成を樂しむ可し、與に始を慮る可からず。（開始するに憂慮させず勝利をイメージさせよ）  
李筌曰く、謀を為すに未だ熟さずんば、士卒に令して之を知らしめるを欲さず。以て成を樂しむ可し、與に始を謀る可からず。是れ以て先に其の耳目を愚し、見知無からしむ。  
杜牧曰く、言うは軍士をして、將軍の令に非ざしむ。其の他は皆て知らず、聾の如く瞽の如くすなり。  
梅堯臣曰く、凡そ軍の權謀は、之に由らしめ、而して之を知らしめず。  
王晳曰く、杜は其れ見聞す。  
何氏は杜牧が註に同じ。  
張預曰く、士卒は懵然（無知）として聞見する所無く、但に命に從うのみ。  
  
（易其事，革其謀，使人無識；）  
李筌曰く、事を謀り或は變じ、而して其の原を識らさず。  
杜牧曰く、為す所の事、有（たも）つ所の謀は、其の造意の端を知らしめず、其の緣（よ）る所の本を識らしめず（事の発端、謀の根本を認識させるな）。  
梅堯臣曰く、其れ行う所の事を改め、其れ為す所の謀を變え、人に能く識らしむこと無かれ。  
王晳曰く、已に行ないし事、已に施せる謀は、當に之を革易すべし、再びす可からず。  
何氏曰く、將が術は以て窮まらず奇を為すなり。  
張預曰く、前に行う所の事、舊く發した所の謀は、皆て之を變易し、人に知らしむ可からず。裴行儉が軍士に令して下に營を訖え、忽（にわか）に移し崇岡に就（つ）かしむが若（ごと）し。初め、將に吏は皆て悅ばず。是の夜、風雨が暴して至り、前の設營所は水深きこと丈餘り、將に士は驚服し、因りて問いて曰く、「何ぞ以て風雨を知るや？」と。行儉は笑いて曰く、「今より但に吾が節制に依る、何須すれど我が由りて知る所を問うや！」と。  
  
（易其居，迂其途，使人不得慮。）  
李筌曰く、行路の便、眾人得て其の情を知らず。  
杜牧曰く、其の居を易え、安を去り危に從う。其の途を迂し、近を捨て遠に即き、士卒に必死の心有り。  
陳皥曰く、將帥は凡そ一事を舉げ、委曲を切りて之を致すは、人をして計慮を得さしむことを無からしむもの。  
賈林曰く、我が要害に居り、能く自らをして移し、途我に近きを、能く之を迂せしめ、機微を發して、路人は知ること能わず。  
梅堯臣曰く、其の安ず所の居を更（あらた）め、其の趨（おもむ）く所の途を迂にし、人をして能く慮（おもんばか）らしめること無らしむ。  
王晳曰く、處易とは、將に敵に致りて以て戰を求むなり。迂途とは、遠きと示して密かに襲うなり。  
張預曰く、其れ居すに則ち險を去りて易に就く、其れ途すに則ち近を捨てて遠に從えば、人は初め其の旨を曉らず、勝に及べば乃ち服す。太白山人曰く、「兵は詭道を貴しとすとは、敵を詭（あざむ）くに止むに非ず、抑（そもそも）我が士卒をも詭き、之に由らしめて之を知らしめず。」  
  
（帥與之期，如登高而去其梯；）  
梅堯臣曰く、進む可くして退（しりぞ）く可からず。  
  
（帥與之深入諸侯之地，而發其機，）  
杜牧曰く、退く心無らしむ。孟明が舟を焚くは是なり。  
一る本に、「帥いて之と高く登る」とす。  
陳皥曰く、其の心機を發（おこ）す。  
賈林曰く、我が機權（機智權謀）を動かし、事に隨（したが）いて應變す。  
梅堯臣曰く、其れ危機を發し、人をして命を盡くせしむ。  
王晳曰く、皆て決戰の志を勵（ふるいたた）すなり。機を發せば、復迴す（戻ること）無れ。賈詡（かく）が曹公に勸めて曰く、「必ず其の機を決すべし」とは是なり。  
張預曰く、其の梯を去るは、進む可くして退く可からず。其の機を發すは、往く可くして返る可からず。項羽が河を濟りて舟を沉（しづ）むが類（たぐい）なり。  
  
  
（焚舟破釜；若驅群羊，驅而往，驅而來，莫知所之。）  
曹操曰く、其の心を一にすなり。  
李筌曰く、還師（軍隊が動きを取り戻す）とは、皆て舟梁（舟や橋）を焚き、其の志を堅くす。既に謀を知らず、又返顧の心無くば、是れ以て羊を驅るが如し。  
杜牧曰く、三軍が但に進退の命を知り、攻取の端を知らず。  
梅堯臣曰く、但に馴然として（教わったとおり）從いて驅し、其の他を知ること莫し。  
何氏曰く、士が往來すは、惟れ將が令して、羊が牧者に從うが如し。  
張預曰く、羊を群して往來すこと、牧者の隨（まま）に。三軍の進退は、惟れ將の揮（さしず）。  
  
（聚三軍之眾，投之於險，此謂將軍之事也。）  
曹操曰く、險は難なり。  
梅堯臣曰く、三軍を險難に措きて勝を取るは、將の為す所の務（つとめ）なり。  
張預曰く、梯を去り機を發し、兵を危險に置きて以て勝を取るは、此れ將軍の務む所なり。  
  
（九地之變，屈伸之利，人情之理，不可不察。）  
曹操曰く、人情とは利を見れば進み、害を見れば退く。  
杜牧曰く、言うは、屈伸の利害、人情の常理、皆て九地に因り以て變化す。今、下文に重ねて九地を舉げんと欲（す）は、此の重言故に、端を發す張本（理由）なり。  
梅堯臣曰く、九地の變，屈す可き伸す可き利有り、人情の常理を須べからく審に之を察す。  
王晳曰く、九地の利害を明らかにし、亦、當に其の變を極めるのみ。屈伸の利を言うは、未だ便を見ずんば則ち屈し、便を見れば則ち伸す。人情の理を言うは、深くば專に、淺くば散す、圍禦の謂なり。  
張預曰く、九地の法、拘泥す可からず。須べからく變通を識り、屈す可きは則ち屈し、伸す可きは則ち伸して、利す所を審にするのみ。此れ乃ち人情の常理、察せざる可からず。  
  
（凡為客之道：深則專，淺則散。）  
梅堯臣曰く、深くば則ち專（もはら）に固まり、淺くば則ち散じて歸す。此れ而下（以下）重ねて九地を言うは、孫子は九變に勤勤す（努力し続けること）なり。  
張預曰く、先に兵を舉ぐを客と為し、入ること深くば則ち專に固まり、入ること淺くば則ち士は散ず、此れ而下に九地の變を言う。  
  
（去國越境而師者，絕地也。絕地は先の九地に含まれず、解釈が註釈家により分かれる）  
梅堯臣曰く、進みて輕に及ばず、退きて散に及ばざるは、二地の間に在り。  
王晳曰く、此れ鄰國の境を越えるなり。是れ孤絕の地を謂い、當に速やかに其の事を決すがごとし。吳王が齊を伐つが若（ごと）し。近の兵は此の如く鮮し、故に九地の例と同じからず。  
張預曰く、己が國を去り、人境を越えて師を用うは、危絕の地なり。秦師が周を過ぎて鄭を襲うが若きは是なり。此れ九地の外に在りて之を言うは、戰國時に間に之有り。  
  
  
（四達者，衢地也。）  
梅堯臣曰く、道を馳せ四つに出ずも、敵は當に一面。  
張預曰く、敵は當に一面なれど、旁國は四屬す。  
  
（入深者，重地也。）  
梅堯臣曰く、士卒が軍を以て家と為さば、故に心に散亂無し。  
  
（入淺者，輕地也。）  
梅堯臣曰く、歸國すに尚近くば、心は能く專ならず。  
  
（背固前隘者，圍地也。）  
梅堯臣曰く、背に險固を負い、前に阨塞に當る。  
張預曰く、前は狹く後は險しく、進退は人に制を受くなり。  
  
（無所往者，死地也。）  
梅堯臣曰く、窮まりて之（ゆ）く所無し。  
張預曰く、左右前後、窮まりて之（ゆ）く所無し。  
  
（是故，散地，吾將一其志；）  
李筌曰く、卒の心を一にする。  
杜牧曰く、守れば則ち志は一つ、戰えば則ち易すく散ず。  
梅堯臣曰く、城を保ち險に備え、志を一にして堅く守る。其の虛懈を候い、出でて之を襲う。  
張預曰く、人を集め穀を聚め、志を一にして固く守る。險に依り伏を設け、敵を不意に攻む。  
  
（輕地，吾將使之屬；）  
曹操、李筌曰く、相い及びて屬せしむ。  
杜牧曰く、部伍（隊伍）にして營壘し、密近にして聯屬（連接）す、蓋し輕散の地を以てす。一は其の逃逸に備え、二は其の敵至るを恐れ、易く相救わしむ。  
杜佑曰く、使は相仍なり。輕地に還師すは、當に安道を促行すがごとし。然して相い屬續（連続）せしむは、以て不虞に備うなり。  
梅堯臣曰く、行かば則ち隊校（隊伍）は相い繼ぎ、止れば則ち營壘は聯屬す。脫せば敵至ること有り、有らざるも散逸すなり。  
王晳曰く、絕てば則ち人は相い恃まず。  
張預曰く、密營促隊とは、相い屬續せしめ、以て不虞に備え、以て逃遁を防ぐ。  
  
（爭地，吾將趨其後；）  
曹操曰く、利地が前に在れば、當に速やかに其の後を進む。  
李筌曰く、利地は必爭、其の備を益すなり。此れ筌は「趨」字を以て「多」字と為（す）。  
杜牧曰く、必爭の地、我れ若し已に後ならば、當に疾趨して爭う、況んや其れ不後においてや（前に居るならなおさら走る）？  
陳皥曰く、二說は皆て非なり。若し敵が地利に據れば、我は後に之を爭う。亦た後に戰地に據れば趨戰の勞ならずや？所謂爭地に必ず其の後を趨すは、若し地利が前に在れば、先に精銳を分けて以て之に據る。彼若し眾を恃みて來爭さば、我は大眾を以て其の後に趨れば、剋たざること無し。趙奢が秦軍を破る所以なり。  
杜佑曰く、利地が前に在れば、當に其の後を進ますがごとし。爭地は、先に據れば勝ち、得ざるは負け、故に其の後により、相及ばしむ。  
梅堯臣曰く、敵が未だ其の地に至らずんば、我若し後に在れば、則ち當に疾趨して以て之を爭**う**。  
張預曰く、爭地は速を貴しとす。若し前驅が至りて後が及ばずんば、則ち未だ可ならず。故に當に其の後を疾進し、首尾が俱に至らしみがごとし。或に曰く、其を後を趨るとは、後發が先に至るを謂うと。  
  
（交地，吾將謹其守；）  
杜牧曰く、嚴しき壁壘なり。  
梅堯臣曰く、謹みて壁壘を守り、其の通道を斷つ。  
王晳曰く、我を襲うを懼れるなり。  
張預曰く、其の路を阻絕すは不當（適切でなく）、但に嚴壁を固く守り、其の來るを候（うかが）い、則ち伏を設けて之を擊つ。  
  
（衢地，吾將固其結；）  
杜牧曰く、交を諸侯と結び、之を牢固（しっかりと）せしむ。  
梅堯臣曰く、諸侯と結び、之を堅固せしめ、敵に先に令すこと勿れ。  
王晳曰く、固むに德禮威信を以てし、且つ示すに利害の計を以てす。  
張預曰く、財幣以て之を利し、盟誓以て之を要し、堅固にして不渝（不変）ならば、則ち必ず我が助けと為る。  
  
（重地，吾將繼其食；）  
曹操曰く、彼を掠すなり。  
李筌曰く、敵に館穀す（敵の館の食糧を食す）なり。「繼」は一（ある）に「掠」に作る。  
賈林曰く、糧を相い繼がしめて絕えず。  
杜佑曰く、深く入りて、當に其の糧餉（糧食）を繼ぐがごとし。  
梅堯臣曰く、道は既に遐絕（遠く隔絶）にして、歸國して糧を取る可からずんば、當に彼を掠して以て軍に食わすがごとし。  
張預曰く、兵が重地に在れば、轉輸は通ぜず。糧を乏す可からずんば、當に彼を掠し以て食を續ぐがごとし。  
  
（圮地，吾將進其塗；）  
曹操曰く、疾く過ぎ去るなり。  
李筌曰く、留る可からず。  
杜佑曰く、疾く行き、此の地に舍すこと無し。  
梅堯臣曰く、依る所無く、當に速（すみやか）に過ぐがごとし。  
張預曰く、圮毀の地に遇えば、兵を引きて速に過ぐべし。  
  
（圍地，吾將塞其闕；）  
曹操、李筌曰く、以て士心を一にす。  
杜牧曰く、『兵法』の「圍師は必ず闕え」は、以て生く路を示し、令して死志無く、因りて之を擊つ。今若し我が圍地に在り、敵が生路を開き以て我が卒を誘わば、我は返して自ら之を塞ぐ。令して士卒に必死の心有（たも）つ。後魏末に、齊の神武は河北に義兵を起し、朱兆、天光、度律、仲遠等四將を尒（わ）けて鄴南に會し、士馬は精強にして二十萬を號し、神武を南陵山に圍む。時に神武は馬二千、步軍は三萬に滿たず。兆等は圍を設け合せず。神武は牛驢を連繫して自ら之を塞く。是に將士は死戰し、四面に奮擊し、大いに兆等四將を破る。  
孟氏曰く、意欲は突圍（突破包圍）、示すに守固を以てす。  
杜佑曰く、其の闕を塞ぎ、走（逃走）の意を欲せず。  
梅堯臣曰く、自ら其の旁道を塞ぎ、士卒をして必ず死戰せしむなり。  
王晳曰く、人（敵人）を懼（おそ）りて、走心有り。  
張預曰く、吾れ敵の圍に在り、敵が生路を開けば、當に自ら之を塞ぎ、以て士心を一にす。齊の神武が牛馬を繫ぎ以て路を塞ぎ、而して士卒が死戰すは是なり。  
  
（死地，吾將示之以不活。）  
曹操、李筌曰く、士の心を勵（はげま）すなり。  
杜牧曰く、之に必死を示し、其れ自奮を令して以て生を求む。  
賈林曰く、財を禁じ糧を棄て、井を堙（う）め竈を破り、必死を示すなり。  
杜佑曰く、士を勵すなり。輜重を焚き、糧食を棄て、井を塞（ふさ）ぎ竈を夷（たいら）にし、生意無きを示し、必ず死戰を殊（こと）にす（死戰を死戰でなくする）なり。  
梅堯臣曰く、必死にして生く可し、人は力を盡すなり。  
王晳は梅堯臣が註に同じ。  
何氏は杜牧が註に同じ。  
張預曰く、輜重を焚き、糧食を棄て、井を塞ぎ竈を夷にし、以て活無きを示し、之を勵し死戰せしむなり。  
  
（故兵之情：圍則禦，）  
曹操曰く、相い持して禦ぐ。  
李筌曰く、敵が我を圍めば、則ち之を禦ぐ。  
杜牧曰く、言うは、兵が圍地に在れば、始め乃ち人人敵を禦ぎ勝を持（持久）す心有り、相い禦ぎ持す。窮せば、則ち心を同じくし守り禦ぐ。  
梅堯臣は杜牧が註に同じ。  
張預曰く、圍在れば、則ち自ら然り持し禦ぐ。  
  
（不得已則鬬，）  
曹操曰く、勢有れば已むを得ざる。  
李筌曰く、有れば已むを得ず則ち戰え。  
梅堯臣曰く、勢往く所無くば、必ず鬬え。  
王晳曰く、死を脫すこと難くは、唯に鬬うのみ。  
張預曰く、勢已む可からずんば、須べからく力を悉し鬬え。  
  
（過則從。）  
曹操曰く、陷ること過ること甚しくば、則ち計に從う。  
李筌曰く、過ぎれば則ち躡（追従）を審（明確）にす。又云く、陷ること過ぎれば、則ち謀は之に從う。  
孟氏曰く、甚しく陷らば、則ち從わざる所無し。  
梅堯臣は孟氏が註に同じ。  
張預曰く、深く危難の地に陷らば、則ち計に從わざること無し。班超が鄯善に在るが若し、麾下數十人と虜使を殺さんと欲（し）、乃ち之を諄諭（じゅんじゅんとさと）す。其の士卒が曰く、「今、危亡の地に在り、死生は司馬に從う」是なり。  
  
（是故，不知諸侯之謀者，不能預交；不知山林、險阻、沮澤之形者，不能行軍；不用鄉導者，不能得地利。）  
曹操曰く、上に已に此の三事を陳（の）べぬ、而して復（の）云うは、力（つと）めて兵を用うこと能わざるを惡（にく）む、故に復之を言う。  
李筌曰く、三事は、軍の要（かなめ）なり。  
梅堯臣曰く、已に〈軍爭〉篇中に解く。重ねて此の三つを陳ぶは、蓋し敵の情狀、地の利害を言い、當に預り知るべし。  
王晳曰く、再び陳ぶは、勤めて之を戒む。  
張預曰く、此の三事を知り、然して後に能く九地の利害を審（つまびらか）にす、故に再び此に陳ぶ。  
  
（四五者，不知一，非霸王之兵也。）  
曹操曰く、九地の利害を謂う。或いは曰く、上の四五事なり。  
張預曰く、四五は、九地の利害を謂う、一つを不知らざること有れば、未だ能く全勝せず。  
  
（夫霸王之兵，伐大國，則其眾不得聚；威加於敵，則其交不得合。）  
李筌曰く、夫れ兵を幷せ震威せば、則ち諸侯自ら顧みて、敢えて預め交わらず。  
杜牧曰く、力を權（はか）りて餘有ればなり、能く敵を分散す。  
孟氏曰く、義を以て人を制さば、人誰が敢えて拒（こば）まん？  
陳皥曰く、霸王の勢有りと雖も、大國を伐てば、則ち我が眾得て聚まらず。要は外援と交を結ぶに在り。若し此の如くあらずして、但に威を以て敵に加え、己の強を逞（たくまし）くせば、則ち必ずや敗れなむ。  
梅堯臣曰く、大國を伐つには、能く其の眾を分つ、則ち力を權りて餘有ればなり。力を權りて餘有れば、則ち威を敵に加う、威を敵に加えば、則ち旁の國は懼れる、旁の國が懼れば、則ち敵の交、合すことを得ざる。  
王晳曰く、能く敵の謀を知り、能く地の利を得、又能く之を形にし、其れ相い救わざらしめ、相い恃みざらしめば、則ち大國と雖も、豈に能く眾を聚め而して我を拒むかな？威の加わる所が大なれば、則ち敵の交は合すことを得ず。  
張預曰く、富強の勢を恃み、而して大國を亟伐せば（伐ちてなすすべがない）、則ち己の民眾は將に怨苦して聚むことを得ず。甲兵の威が、倍して敵國に勝たば、則ち諸侯は懼れて敢て我と交を合わさず。或に曰く、大國を侵伐し、若し大國が一敗せば、則ち小國は離れて聚らず。若し晉楚が鄭を爭い、晉が勝てば則ち鄭は附く、晉が敗れれば則ち鄭は叛く。小國が既に離れれば、則ち敵國の權力は分れて弱くなる。或いは、我の兵が威を得て以て增し彼に勝つは、是れ則ち諸侯豈に敢て敵人と交を合わすや？  
  
（是故，不爭天下之交，不養天下之權，信己之私，威加於敵，故其城可拔，其國可隳。）  
曹操曰く、霸者は、結ばずして天下諸侯の權を成す。天下の交を絕ち、天下の權を奪う。故に己が威を得て伸（の）べ自私す（只に自己の打算を為す）。  
李筌曰く、能く天下の交を絕ち、惟に得て己の私志を伸べ、威して外交すること無き者。  
杜牧曰く、信は伸なり。言うは、鄰援を結ばず、機權の計を蓄養（積蓄培養）せず、但に兵威を逞くし、敵國に加え、己が私欲を伸ぶを貴す（重視す）。此の若きは、則ち其の城を拔く可く、其の國を隳（毁坏；やぶ）る可し。齊の桓公が管仲に問いて曰く、「必ず先に甲兵を頓し、文德を修め、正に疆を封じて四鄰に親せば、則ち可ならん」かと。是に魯、衛、燕侵す所の地を復し、好（よしみ）を以て成し、四鄰は大いに親す。乃ち南に楚を伐ち、北に山戎を伐ち、東に令支を制し、孤竹を折り、西に流沙を（征）服す。兵車の會は六、乘車の會は三。乃ち諸侯を率て天子に朝す。吳の夫差が會稽に越を破り、齊を艾陵に敗り、商魯に溝を闕（か）き、黃池に晉と會し、長を爭いて反（かえ）り、威を諸侯に加え、諸侯は敢えて與に爭わず。句踐が之を伐ち、師を齊楚に乞うも、齊楚は應じず。民は兵頓に疲れ、越の滅ぶ所と為る。越王の句踐が戰を申包胥（しんほうしょ）に問いて曰く、「越國の南は則ち楚、西は則ち晉、北は則ち齊、春秋皮幣玉帛子女以て賓服（服従）す。未だ嘗て敢えて絕たず、求むは以て吳に報いん、願わくば以て此れ戰わん」と。包胥が曰く、「善きかな、蔑（さげすみ）を以て加えん！」と。遂に吳を伐ち、之を滅ぼす。  
賈林曰く、諸侯が既に懼れ、得て附聚（会集）せず、敢えて合從せず、我の智謀と威力に餘り有り、諸侯は自から歸す。何んぞ之を養交することを用うるや？「不養」を一（ある）に「不事」に作る。  
陳皥曰く、智力既に全くし、威權は我に在り、但に自ら士卒を養い、不可勝の謀を為せば、天下の諸侯は權（勢）無く事とす可し（用いることが出来る）。仁智義謀が己に之を私有し、用い以て眾を濟（すく）う。故に、曰く、私を伸べば、威は天下に振（ふる）う。德は四海を光（て）らし，恩は品物を沾（うるお）し、信は豚魚に及び、百姓は歸心し、不服を思うこと無し。故に城を攻めば必ず拔き、國を伐てば必ず隳（やぶ）る。  
梅堯臣曰く、敵が既に諸侯と合交を得ずんば、則ち我は、亦、其の交を爭わず、其の權を養わず、己が力を用いて已むのみ。威は、亦、增し敵に勝たむ。故に、其の城を拔く可し、其の國を隳る可し。此れ霸王の兵を謂う。  
王晳曰く、交を結び權を養えば、則ち天下は從う可し。私を申（申束：約束）して威を損（そこな）えば、則ち國城を保たず。  
張預曰く、交援を爭わずんば、則ち勢は孤（立）し寡を助く（増長する）。權力を養わずんば、則ち人は離れ國は弱る。一に己が私忿を伸べ、暴兵が敵國に威（嚇）せば、則ち終（つい）には敗亡を取る。或に曰く、敵國が眾既に得て聚らず、交、又、得て合さずんば、則ち我は當に其の交を絕つ。其の權を奪い、己が欲す所を伸ぶを得て、而して威は敵國に倍す、故に人城を得て拔く可し、人國を得て隳る可し。  
  
（施無法之賞，懸無政之令，）  
曹操曰く、言うは、軍の法令は、豫（あらかじ）め懸（賞）之（これ）を施さず。『司馬法』に曰く、「敵を見て誓を作し、功を瞻（み）て賞を作す」と。  
賈林曰く、城を拔かんと欲し、國を隳る時、故に法外の賞罰を懸け、政外の威令を行い、故に常法常政を守らず。故に曰く「無法」、「無政」と。  
梅堯臣曰く、功を瞻て賞を行い、法は預め設けず、敵に臨みて誓を作し、政は先に懸けず。  
王晳曰く、姦（計）媮（狡猾）を杜（絶）すなり。曹公が曰く「軍法令不預施懸之。《司馬法》曰：『見敵作誓，瞻功行賞。』」此の謂なり。  
張預曰く、法を先に施さず、政を預め告げず、皆て事に臨みて制を立ち、以て士心を勵ます。『司馬法』に曰く、「敵を見て誓を作し、功を瞻（み）て賞を作す」と。  
  
（犯三軍之眾，若使一人。）  
曹操曰く、犯は用なり。言うは、賞罰を明らかにせば、眾を用うと雖も、一人を使うが若きなり。  
李筌曰く、善く兵を用るとは、法を為し政を作すも人は知らず、事に懸けて令せずして人が之に從ふ。是を以て眾を犯すこと一人の如し。  
梅堯臣曰く、犯は用なり。賞罰を嚴明にせば、多を用いて寡を用うが若し。  
張預曰く、功を賞すに時を逾（こ）えず、罪を罰すに列を遷さず（同列にしておく）。賞罰の典既に明らかにして且つ速くば、則ち眾を用うこと寡の如し。  
  
（犯之以事，勿告以言；）  
梅堯臣曰く、但に用いて以て戰い、告ずして以て謀る。  
王晳曰く、情が泄（も）れなば則ち謀は乖（やぶ）らる。  
張預曰く、之を戰鬬に任用するに、之を諭すに權謀を以すること勿れ。人は謀を知れば則ち疑う。裴行儉（はいこうけん）が士卒に告げずして以て營を徙（うつ）せし（理）由が若き是なり。  
  
（犯之以利，勿告以害。）  
曹操曰く、害を知らしむこと勿れ。  
李筌曰く、犯は用なり。卒が言と害を知れば、則ち疑難を生ず。  
梅堯臣曰く、用いるに利を知らしめ、害を知らしめず。  
王晳曰く、疑を慮（おも）えば懼るなり。  
張預曰く、人の情は利を見れば、則ち進み、害を知れば則ち避ける。故に告ぐに害を以てすること勿れ。  
  
（投之亡地然後存；陷之死地然後生。）  
曹操曰く、必ず死戰に殊（ころ）さば、亡地に在りて敗者無し。孫臏が曰く「兵は之を死地に投ぜざるを恐るなり」と。  
李筌曰く、兵は死地に居れば、必ず命を決して鬬い以て生を求む。韓信が水上（かわのほとり）の軍とは、則ち其の義なり。  
梅堯臣曰く、地が亡と曰うと雖も、力戰せば亡ならず、地が死と曰うと雖も、死戰せば死なず。故に亡は存の基、死は生の本なり。  
何氏曰く、漢王が將に韓信を遣して趙を擊つが如し、未だ井陘口に至らざること三十里にして、止りて舍す。夜半に傳を發し、輕騎二千人を選び、人が一赤幟（紅旗）を持ち、間道により山に萆（かく）れて趙軍を觀る。誡めて曰く、「趙は我が走（にぐ）を見れば、必ず壁を空にして我を逐う。汝は疾く趙壁に入りて、趙幟を拔き、漢幟を立てよ」と。其の裨將に傳餐（食物を伝送すること）を令して曰く「今日趙を破りて會食せむ」と。（韓）信乃ち萬人をして先行せしめ、出でて、背水に陳す。趙軍は遙かに見て大いに笑う。平旦に、信は將軍の旗鼓を建て、行きて井陘口を出ず。趙は壁を開き之を擊つ。大いに戰うこと良く久し。是に信は水上軍を走（に）ぐ。趙は壁を空けて信を逐う。信は已に水上に軍を入れ、軍は皆て死戰に殊さば、敗れる可からず。信は出す所奇兵二千騎、馳せて趙壁に入り、皆て趙幟を拔き、漢の赤幟を立つ。趙軍は信を攻めて既に得ず。壁に還りて、漢幟を見て、大いに驚き、遂に亂れて、遁走す。是に漢兵は夾擊し、大いに趙軍を破り虜にす。陳餘（ちんよ）を泜水上に斬り、趙王を擒（いけどり）にす。諸將は因りて信に問いて曰く、「兵法に、右に山陵を背にし、前に水澤を左にす。今、將軍は臣等に令して反りて背水の陳。曰く、『趙を破りて會食す』と。臣等は服さず。然るに竟（つい）に以て勝つ、此は何なる術なりや」と。信の曰く、「此は兵法に在り。顧みて諸君は察せざるのみ。兵法に曰わずや、『之を死地に陷れ而る後に生く、之を亡地に置きて而る後に存す』と。且（また）信は素より拊循の（訓練された）士大夫を得るに非らず、此れ所謂市人を驅りて戰う、其の勢は之を死地に置くに非ずして、人をして人自ら戰を為さしむ。今、之に生地を與えば、皆走ぐ。寧（いずく）んぞ尚（なお）得て之を用う可きや（どうして用いることができようか）？」と。諸將皆服して曰く、「及ぶ所に非ず！」と。梁將の陳慶之（ちんけいし）渦陽城を守り、後の魏軍と相持し、春より冬に至り、數十百戰し、師は老（つか）れ氣は衰う。魏の援兵は復（また）軍後に壘を築かむと欲（す）。諸將は腹背に敵を受くるを恐れ、退師を議す。慶之が曰く、「共に來りて此に至り、涉歷（経過）すること一歲、糧仗（兵糧と武器）を糜費（浪費）すること其の數極めて多し。諸軍は並びて鬬心無く、皆て退縮を謀る。豈に是れ功名を立てむと欲（し）、直に聚りて鈔暴を為すのみ（掠奪し撹乱するだけのことか）！吾が聞くに、兵を死地に置けば、乃ち生を求む可くして、須べからく大合を虜し（夢中で一体となり）、然る後に戰に與（くみ）せば、必ず捷す（戦いに勝つ）と」。諸將は其の計を壯とし、之に從う。魏人が犄角（対峙）し十三城を作る。慶之は銜枚（馬に枚をくわえさせ；音をたてず）夜に出で、其の四壘を陷す。餘る所の九城は、兵甲猶盛んなり。乃ち其の俘馘（捕虜）を陳（なら）べ、鼓譟して（太鼓を鳴らし大声を挙げて）攻め、遂に大いに奔潰し（逃惑い総崩れとなり）、斬り獲り略し盡す。後魏の末、齊の神武が河北に義兵を興す。時に尒朱兆等の四將は、兵馬二十萬と號し、洹水を夾みて軍す。時に神武が士馬は三萬に滿たず。眾を以て寡は敵せず、韓陵山に遂われ圓陳を為し、牛驢を繫ぎて以て道を塞ぐ。是に將士は皆て死戰し、四面で奮擊し、大いに之を破る。齊の神武が兵は少く、天光等が兵は十倍、圍みて之を缺く（逃げ道を空ける）。神武は乃ち自から其の缺を塞ぐ。士皆必死の志有り、是を以て敵を破るなり。高齊の北豫州刺史司馬消難（しばしょうなん）が後周に降るを請い、周將楊忠（ようちゅう）と柱國達奚武（たつけいぶ）之を援(助)す。是に共に騎士五千人を率い、各（おのおの）馬一匹に乘り、間道により齊境を馳せ入ること五百里、前後に三使を遣し消難に報ずも而るに皆て反命せず。豫州を去ること三十里、武は疑い變が有り、還らんと欲（す）。忠が曰く、「進めば死有り、退けば生無し！」と。獨り千騎を以て夜に城下に趣く、四面は峭（きび）しく絕たれ、徒に擊析の聲（拍子木を打ち鳴らす音）を聞く。武は親ら來り、數百騎を麾（さしまね）き以て西す。忠は餘騎を勒（ととの）え動かず、門が開くを候（うかが）いて入る。乃ち遣を馳せて武を召く。時に齊の鎮城の將の伏敬遠が甲士二千人を勒え東陴に據り、烽（のろし）を舉げて嚴しく警（備）せり。武は之を憚（はばか）りて、城を保つを欲せず、乃ち多く財帛を取りて、消難及び其の屬を以て先に歸る。忠は三千騎を以て殿（しんがり）を為し、洛南に到り、皆て鞍を解きて臥す。齊眾が來りて追い、洛北に至る。忠が將士に謂りて曰く、「但に飽食せよ（腹一杯喰え）。今は死地に在り、賊は必ずや敢えて水（かわ）を渡り以て吾が鋒に當ることなし」と。食が畢（おわ）りて、齊兵は水を渡ると佯若し（みせかける）、忠は馳せて將に之を擊たんとす。齊兵は敢えて逼（せま）らず、遂に徐（々）に引きて退きぬ。  
張預曰く、之を死亡の地に置けば、則ち人は自ら戰を為し、乃ち存活（生存）す可し。項羽が趙を救うに、釜を破り廬を焚くは、示すに必死を以てす。諸侯が壁上より觀るに、楚の戰士は一が十に當らざること無く、遂に秦將を虜とすは是なり。  
  
（夫眾陷於害，然後能為勝敗。）  
梅堯臣曰く、未だ難地に陷らずんば、則ち士卒が心は專（もはら）ならず。既に危難に陷らば、然る後に勝敗は人が之を為すに在るのみ。  
張預曰く、士卒が命を用いば、則ち勝敗の事は、我が為す所に在り。  
  
（故為兵之事，在於順詳敵之意，）  
曹操曰く、佯は愚なり。或に曰く、彼は進まんと欲（し）、伏を設けて退く。彼は欲去らむと欲（し）、開きて之を擊つ。  
李筌曰く、敵は攻めむと欲（し）、我は守を以て之を待つ。敵は戰わむと欲（し）、我は奇を以て之を待ち、退き伏せて利を誘う、皆て其の欲す所に順（したが）う。  
杜牧曰く、夫れ敵の意に順うは、蓋し言うは、我が敵を擊たむと欲（し）、未だ其の隙を見ざれば、則ち形を藏（かく）し跡を閉じる。敵人の為す所、之に順いて驚くこと勿れ。假に如し強きこと以て我を陵さば、我は則ち怯を示して伏せ、且つ其の強に順う。以て其の意を驕らせ、其の懈怠を候（うかが）いて之を攻む。假に如し退きて歸らむと欲（せ）ば、則ち圍を開きて去らしめ、以て其の退に順いて、鬬心無からしめて、遂に因りて之を擊つ。皆て敵の旨に順う。  
陳皥曰く、敵の旨に順うは、多說を假さず（不要）。但に強は之を示すに弱、進は之を示すに退、敵心に（警）戒せしめずして、然して後に攻めば之を必ず破らむ。  
梅堯臣曰く、怯を佯（いつわ）り、弱を佯り、亂を佯り、北（逃げる）を佯り、敵人が輕く來れば、我が志は乃ち得らる。  
張預曰く、彼は進まむと欲（せ）ば、則ち之誘いて進ましむ。彼は欲退かむと（せ）ば、則ち之を緩めて退かしむ。其の旨を奉順し（意のままに従い）、奇伏を設けて以て之を取る。或に曰く、敵に欲す所有らば、當に其の意に順いて以て之を驕らせ、留りて後圖（今後の計）を為す。東胡が使を遣わし冒頓に謂りて曰うが若（ごと）し。「頭曼（冒頓の父）の千里馬を得んと欲（す）」と曰わば、冒頓は之を與（あた）う。復（また）使を遣わし來りて曰く、「願わくば單于（首長の冒頓）の一（ひとり）の閼氏（単于の妻）を得む」と。冒頓は又、之を與う。其の驕怠に及びて、之を擊ち、遂に東胡を滅すは是なり。  
  
（幷敵一向，千里殺將，）  
曹操曰く、兵を幷せて敵に向えば、千里と雖も能く其の將を擒（とりこ）にす。  
杜牧曰く、上文に兵の事を為すに、敵人の意に順うに在りと言う。此れ乃ち未だ敵人の隙を見ざるのみ。若し、已に其の隙を見、攻む可き勢有らば、則ち須べからく兵を幷せ力を專（一）にし、以て敵人に向えば、千里の遠さと雖も、亦、以て其の將を殺す可し（殺すことが出来る）。  
賈林曰く、能く利を以て敵人を誘い、一向（一致）して之に趨（おもむ）かしめば、則ち我が遠く千里と雖も、亦、其の將を擒にし殺す可し。  
梅堯臣曰く、敵に一向して隨い、然る後に伏を發し奇を出だせば、則ち能く遠く其の將を擒にす。  
王晳曰く、敵の意に順い、敵の形に隨えば、其の空虛に及（いた）り虞（うれえ）ず、兵を一力に幷せ以て之に向い、勢に乘りて千里にして軍を覆えし將を殺す可し。  
張預曰く、敵が既に驕惰ならば、則ち兵力を幷せ以て之に向えば、以て其の軍を覆し、其の將を殺す可し。則ち冒頓が東胡を滅せる事が明らかな如し、是なり。  
  
（此謂巧能成事者也。）  
曹操曰く、是れ事を成すに巧（たくみ）なる者なり。  
一の作るに、「是れ巧なる攻の事を成すと謂う」と。  
梅堯臣曰く、能く敵に順いて勝を取るは、機巧者（才智を廻らす者）なり。  
何氏曰く、能く此の如き者、是れ巧みに攻めて事を成すなり。  
張預曰く、始めは其の意に順い、後に其の將を殺すは、事を成すに巧なり。  
  
（是故，政舉之日，夷關折符，無通其使，）  
曹操曰く、謀が定まれば、則ち關（関所）を閉じ以て其の符信（通行手形、通信）を絕ち、其の使を通すこと勿れ。  
李筌曰く、政令が既に行われ、關を閉じ符を折（た）たば、得て沮議（異義）する所有ること、眾士の心恐惑すること無きなり。  
杜牧曰く、其の所を通さずは、豈に敵人の使か？若し敵人の使を受けずんば、則ち何ぞ必ず關を夷（とど）め符を折（た）ち、然して後に不通を為すや？答えて曰く、關を夷め符を折つは、國人をして出入をささず。蓋し敵人に問使が潛來すること有るを恐る、或は、形を藏し跡を隱し、危に由り險を歷（わた）り、或は符を竊み信を盜み、姓名を假託（かたり）し、而して來りて我を窺（うかが）うなり。其の使者を通すこと無かれ、敵人が若し使有りて來りて聘す（礼物を献じる）は、亦、之を受く可からず。恐るらく智能の士有りて、張孟談（ちょうもうだん）、婁敬（ろうけい）の屬の如きは、其の微を見て知著（どうなるかを知り）、我が虛實を測るなり。此れ乃ち兵の形未だ成らずして、敵人が先事以て我を制すを恐れる。兵の形已に成れば、境の後に出で、則ち其の間に在らしむ、古の道なり。  
梅堯臣曰く、夷は滅なり、折は斷なり。舉政之日く、關梁（関門橋梁）を滅塞し、符節を斷毀し、使は通さず。使は通さずとは、我が事泄（も）れるを恐るなり。  
張預曰く、廟算が已に定まり、軍謀が已に成らば、則ち關梁を夷塞し、符信を毀折して、使命を通すこと勿れ。我が事を泄らすを恐るなり。彼が來さしむこと有らば、則ち當に之を納むべし。故に下文に云く、「敵人が闔を開かば、必ず亟（すみやか）に之に入れ」と。  
  
（厲於廊廟之上，以誅其事。）  
曹操曰く、誅は治なり。  
杜牧曰く、厲は厲を揣（おしはか）るなり。言うは、廊廟の上、其の事を誅治し、成敗を先に定め、然して後に師を興す。  
一る本は「以て其の事を謀りて」に作る。  
梅堯臣曰く、廊廟（廟堂）の上にて嚴整（嚴明に整齊し）、以て其の事を計ること、其の密を言う。  
何氏曰く、廟勝の策を磨厲（厳密に練り上げ）、以て其の事を責成す（責任を持って完遂せしめるよう指令する）。  
張預曰く、兵は大事にて、輕く議す可からず。當に廟堂の上にて惕厲（厳しく慎重にし）、其の事を密かに治め、謀を外に泄らさぬことを貴しとなす。  
  
（敵人開闔，必亟入之。）  
曹操曰く、敵に間隙有らば、當（まさ）に急ぎて之（これ）に入るべし。  
李筌曰く、敵の開闔（開閉）が未だ定らずんば（躊躇しておれば）、必ず急ぎて來る。  
孟氏曰く、開闔は間者なり、有間にして（間隔を空けて？）來らば、則ち疾（心配事）之を內にす。  
梅堯臣は孟氏が註に同じ。  
張預曰く、開闔は間使を謂う。敵の有間にして來らば、當に急ぎて之を受くべし。或に曰く、敵人或いは開き或いは闔（と）じ、出入に常無きを謂う。進退が未だ決らずんば、則ち宜しく速（すみやか）に之に乘るべし。  
  
（先其所愛，）  
曹操曰く、利便に據るなり。  
李筌曰く、先に其の積聚（物資・財貨）及び妻子を攻む、利は其の用を擇（えら）ばず。  
杜牧曰く、凡そ是れ敵人の愛（いつく）しみ惜（お）しみ倚（よ）り恃（たの）みとする所、以て軍と為さば、則ち先に之を奪うなり。  
梅堯臣曰く、先ず其の便利愛惜の所を察すなり。  
何氏は杜牧が註に同じ。  
  
（微與之期。）  
曹操曰く、後に人を發して、先に人に至る。  
杜牧曰く、微は潛なり。言うは、以て敵人の愛す所利便の處、期を為して（時期を決めて）、將に謀り之を奪わんと欲（す）、故に潛（ひそか）に往（ゆ）きて期に赴（したが）いて、敵人に知らしめず。  
陳皥曰く、我が若し先に便地を奪い、而して敵が至らずんば、其の利有りと雖も、亦、奚んぞ之を用いん？是れ以て其の愛惜する處を取らむと欲（し）、必す先に微（ひそか）に敵人と相期して（敵に期待させて）、之を誤りて必ず至らしむ。  
梅堯臣曰く、微露の期（時期をひそかに漏らし）、間（者）をして歸告せしめ、然る後に、我が後人を發し、先人に至る。  
王晳曰く、權は譎なり。微は密を示す所以。曹公曰く、「先に敵が至るなり」と。後に發すは、其れ必ず赴かんと欲（す）。先に至るは、其の愛しむ所を奪うなり。  
張預曰く、兵の愛しむ所は、便利の地。我が先に據らむと欲（し）、當に微に其の意を露（あらわ）にし、之と相期すべし。敵方は之に趨り、我は乃ち後發して先に至る。敵をして先に趨らしむ所以は、我が至りて敵の來らずを恐るなり。故に曰く、「爭地は、吾は將に其の後に趨らんとす」と。  
  
（踐墨隨敵，以決戰事。）  
曹操曰く、規矩（規則と礼法）を行踐（行動）して、常無きなり。  
李筌曰く、墨は出道なり。遲れて出道して之に從えば、恐ること及ばず。  
杜牧曰く、墨は規矩なり。言うは、我は常に須べからく規矩を踐履（実践）し、深く法制を守り、敵人の形に隨う。若し乘る可き勢有らば、則ち出でて、決戰すなり。  
陳皥曰く、兵は迅速を要在すと雖も（迅速でなくばならないが）、以て戰事を決すは、然（もとより）始めから末に及（いた）りて、須べからく法制を守り、縱（たとえ）勝捷を獲ようと、亦、擾亂を爭競す可からず。城濮の戰では、晉の文公は有莘の墟に登り以て其の師を望みて曰く、：「少長（年少者と年長者）に禮有り、其れ用う可し」と。  
「踐墨」一は「剗墨」に作る。  
賈林曰く、剗は除なり；墨は繩墨なり。敵の計に隨いて以て戰事を決す。惟に是の利に勝つに、繩墨を以て守る可からずして為せ。  
梅堯臣曰く、舉動は必ず法度を踐（ふ）み、而して敵に隨いて屈伸し、利に因りて以て戰を決す。  
王晳曰く、兵法を踐むこと繩墨の如く、然して後に以て敵に順いて勝を決す可し。  
張預曰く、法度を循守し、規矩を踐履し、敵の變化に隨い、形勢は常無くば、乃ち以て決戰して勝を取る可し。墨は繩墨なり。婦人は左右、前後、跪起す（跪き立つ）は、皆て規矩繩墨に中（あた）る是なり。  
  
（是故，始如處女，敵人開戶；後如脫兔，敵不及拒。）  
曹操、李筌曰く、處女は弱を示し、脫兔は往（ゆ）くこと疾（はや）し。  
杜牧曰く、言うは、敵人が初の時に我を謂いて能く為す所無く、處女の弱きが如し。我は因りて急ぎて去り之を攻むこと、險迅疾速、兔の脫走すが如く、捍（あら）がい拒（こば）む可からず。或に曰く、我が敵を避けて走（にげ）ること脫兔の如し。曰く、非なり（間違っている）。  
梅堯臣曰く、始めは處女の若し。規矩を踐むの謂なり。後に脫兔の若し。敵に應じて戰を決めること速きなり。  
王晳曰く、處女は敵に隨うなり。戶を開くに虞せず。脫兔は疾なり。若田單が即墨を守りて燕軍を破るは是なり。  
張預曰く、守るに則ち處女の弱きが如く、敵をして懈怠せしむ。是れ以て隙を啓（ひら）く。攻むは則ち猶脫兔の疾（と）きがごとく、敵の倉卒（あわてふためくこと）に乘ず、是以て禦（ふせ）ぐこと莫（な）からん。太史公の謂く、田單の即墨を守り攻むこと騎劫（強奪）す、正に此の語の如し。其れ然らずや？  
  
了